表紙, 目次, 抄録, 漫録

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38578

明治三十八年十二月八日發行

十全會雜誌

第三十九號

《非賣品》

金澤醫學專門學校十全會

十全會雜誌第三十九號目次

○原著及實驗

○心臟及ビ脉管ノ先天性畸形ニ就キテ（承前）　特別會員　小原芳雄

○臺灣ニ於ケル「フィラリヤ」性乳糜血尿ノ一例　中川幸庵

○抄錄

○石炭酸カンフルノ外科的感染ニ對スル効用

○日露戰爭ニ於ケル血管損傷及外傷性動脉瘤

○化膿性腦膜炎ノ外科的療法

○漫錄

○沼津舊記……池部雨橋

○白山登山之記……米溪生

○秋季雜吟

○會報

○叙任及辭令○本會役員○謹んで大西先生を送る○大西先生送別會○大西先生の書翰○舊雜誌部委員渡邊有壁両君を送る○木村博士の祝辭演說○卒業生諸君を送る○卒業証書授與式○卒業生諸氏送別會○河野通夫君逝く○嗚呼川勝良三君○松浦先生○入學式○入學生○醫學科第一年級々會○第十二回解剖遺体法會○天長節拜賀式○雜誌部編輯會記事○第二年級第一次級會○醫學科第三年級々會記○アドリナリン製劑○三十七年度十全會收支決算報告

○會告

○寄贈及交換書目○會費領收

謝辞

本誌第三十八號は實に學年末に至りて發行し、編輯局裡匆卒の際、校正するところ猶活字の誤植多く、著者の好意に背くや切なり、謹んで一言を呈し其の粗漏を謝すること爾り。

雜誌部委員

謹告

回顧スレハ前キノ本校教授(現ニ京都醫科大學教授)醫學博士鈴木文太郎君就職ノ當時、諸般ノ設備尚甚ダ幼稚ニ屬シ、書籍標本ハ勿論、其他授業上ノ用具ニ到ルマデ多クハ藩末ノ遺產ニ係ル頽廢物ニ過ギザリキ。然ルニ君ハ深淵ナル學識ト天賦ノ妙技ヲ以テ此機運ニ處シ敢テ誤ラズ、日夜之レ努メ、在ルコト三年ニ滿タズシテ本校基礎醫學ニ今日ノ基ヲ樹テラル。殊ニ君ハ學生涵養ニ向ツテ獨特ノ智囊ヲ有シ、恩威両ナカラ全ク、學生亦タ慈父母ノ如ク君ニ畏服セシコトハ、當時君ニ親炙セシモノノ洽ク知ル所トス、依テ吾人後輩ハ今茲ニ聊カ左ノ方法ヲ設ケ君カ偉功ヲ本校ト共ニ永ク傳ヘント欲ス、有志ノ諸君競フテ此擧ニ贊助アランコトヲ希望ス。

一鈴木博士半身肖像ヲ匾額ニ製シ本校ニ掲ク

一有志醵金ハ一人金五錢ヨリ三十錢マデトス

一醵金ハ本校十全會會計部ニ御送附ノコト

一醵金ノ〆切ハ明治三十九年三月末日

一醵金額及姓名ハ十全會雜誌ヲ以テ時々廣告スルノ外別ニ受領證ヲ發セズ

一事業終局後決算表ヲ製シ十全會雜誌ヲ以テ廣告ス

一若シ醵金額ニ剩餘ヲ生ズレバ書籍其他ノ物品ニ代ヘ本校十全會ニ寄附ス

明治三十八年十一月

發起人　石川喜直　金子治郎　三木三郎

臨牀藥石新報

月刊(毎月十五日)毎號約四十八頁

本新報ノ目的ハ　新報○寫抄○摘錄○處方○質疑○時價等ノ諸欄ヲ設ケ臨牀上ニ關スル藥石ノ內外新說ヲ網羅シ特ニ新藥ノ應用ヲ揭載シテ實地醫家諸彥ニ紹介スルニ在リ、我邦藥石ニ關スルノ雜誌敢テ少ナキニアラスト雖、恐ク藥學及藥業ニ就テノ記事ノミニシテ臨牀上ノ應用ニ重キヲ措クカ如キハ絕エテ見ザル所也。是レ此發行ヲ企テタル所以トス

初號目次

新報「ケレーン」ノ局所痲醉實驗（縣立千葉病院西田貫三述）「フ井ブロリジン」「ドクトルフェレッキス、メンデル」述。K、O譯

纂抄外國ノ部—結核性膿瘍ニ對スル「メチーレン」青●急性酸化炭素ニ對スル刺絡ノ效驗●足汗症散布藥「アドリン」●「アドレナリン」六項●內國ノ部—「アドレナリン」三項

方府消化器疾患處方（小兒科）—醫學士狂雲生●新藥金匱—解熱劑「アプラストール」●「アツェトピュリン」●次度酸「アコピリン」

雜錄醫家調劑上ノ注意（藥學士松隆生）

摘錄最近著ノ外國雜誌數種ヨリノモノ八項

時價新藥ノ分

見本郵券十錢御送致御申込アレハ直ニ發送スベシ

代金ハ總テ前金制ニシテ一冊（郵稅共）金拾錢五厘　六冊前金（郵稅共）金五拾八錢　十二冊前金（郵稅共）金壹圓拾錢

醫事新聞本社直接購者諸氏ニハ六冊前金（郵稅共）金五拾五錢　十二冊前金（郵稅共）金壹圓ノ割

藥石新報社

東京市本郷區元町二丁目醫事新聞社內

抄錄

○石炭酸カンフルノ外科的感染ニ對スル効用

Dr. V. Chlumsky.

氏ハ外科的感染ニ次ノ合劑ヲ賞用ス

處方

純石炭酸	三〇、〇
カンフル	六〇、〇
無水アルコール	一〇、〇

用法、丹毒ノ新蘚ニシテ蔓延甚シカラザルモノニハ一日二乃至五回患部及周圍ノ皮膚ニ仝劑ヲ塗布ス、蔓延甚シキモノニハ以上ノ外仝劑ヲ浸シタル脱脂綿ヲ局部ニ貼シ油紙ヲ以テ其上ヲ被覆シ卷軸帶ヲ以テ固定スベシ、此繃帶ハ一日三回ノ交換ヲ要ス

蜂窩織炎特ニ瘰疬及膿疱疹ノ初期モ仝樣ニ處置スベシ而シテ化膿ノ徵候アラバ局部ヲ切開シ創内ニ仝劑ヲ多量ニ注入スベシ（深在性膿瘍ニハ三十乃至五十瓦ヲ注入シタルモ副作用ヲ起サヾリキ）。感染創ハ仝劑ヲ以テ洗滌シタル後仝劑ヲ浸シタル「ガーゼタンポン」ヲ創内ニ挿入スルヲ可トス

結核性瘻管、水脉管炎、癤（フルンケル）等モ仝樣ニ處置スルニ奏効現著ナルヲ見ル

此ノ合劑ノ皮膚及創面刺擊作用ハ全ク欠除スルヲ通例トス、只甚ダ稀ニ短時間ノ灼熱ヲ感ゼシムルニ過ギズ、加之仝劑ハ之ヲ密閉シタル瓶中ニ貯藏スル時ハ長ク變質スルコトナシ。（外科中央雜誌千九百五年第三十號）

○日露戰爭ニ於ケル血管損傷及外傷性動脉瘤

Leo. Bornhaupt.

氏ハ昨年三月ヨリ本年三月ニ至ルマデ「ハルピン」ノ露國一病院ニ勤務シ負傷兵ヲ治療セルコト三千六百人ナルガ

血管損傷ニ關シテ次ノ結論ヲ下シタリ

一、近世套被彈ニ因スル血管損傷ニ對シテ、戰線ニ於テ直チニ手術スルコトハ大出血ナキ以上ハ其必要ヲ認メズ、受傷後即時ニ血管幹部ノ結紮ヲ行フコトハ末梢部ノ脱疽及後出血ヲ起スノ危險甚ダ大ナリ

一、戰線ニ於テハ先ヅ防腐繃帶ヲ施シ次ニ運搬ノ際ニハ受傷部ヲ固定スルヲ要ス之レ動脈瘤發生ノ趨勢ヲ減却スルノミナラズ後出血及創傷感染ノ蔓延ヲ防遏スルニ必要手段ナリ

一、動脈瘤囊ノ摘出ハ事情ノ許ス限リハ凡ソ受傷後四週目ニ於テ射管全ク治癒シタル時ニ嚴重ナル防腐ノ下ニ行フヲ可トス然ル時ニハ動脈瘤ノ確實ナル根治ヲ期スルコトヲ得ルモノナリ

一、外傷性動脈瘤ハ數ケ月ノ後ニ自然ニ消失シ其雜音モ聽取スベカラザルニ至ルコアトリ

一、小口徑套被彈ハ血管ニ命中スル時ニ決シテ其彈道ヲ變ズルコトナシ即チ血管ハ必ズ擦過セラルヽカ若クハ穿孔セラルヽカノ損傷ヲ被ルモノトス。

（ランゲンベック氏外科寶函第七十七卷）

○化膿性腦膜炎ノ外科的療法

Kümmell.

化膿性腦炎ノ中例ヘバ耳性腦膜炎ノ或者ノ如ク化膿尙ホ限局スルモノハ外科的手術ニヨリテ屢々治癒スルコトアリ、氏モ實ニ好成績ヲ得タル三例ヲ有ス、然レ共廣汎性ノモノト雖モ手術ニヨリ治癒スル望ナキモノニアラズ從テ之ニ對シテモ手術的襲擊ヲ加ウベキコトヲ勸ムル人少カラズ、仝氏ハ又結核性腦膜炎ニ對シテモ數度穿顱術ヲ試ミタルモ不幸ニシテ未ダ一回モ治癒ニ至ラシメタルモノアラズ、然レ共劇烈ナル頭痛及熱發等ニ對シテハ穿顱術ハ屢々好影響ヲ與フルコトヲ見タリ

氏ノ今回報告セル第一例ハ三十三歲ノ男子、電車ヨリ飛下リ過ツテ頭蓋底骨折ヲ受ケ、化膿性腦膜炎ヲ續發セルコトハ患者ノ現ハセル主徵及腰部穿刺ニヨリ得タル濃厚

ナル膿汁トニヨリ確診スルコトヲ得タリ、氏ハ受傷後十日目ニ於テ精神昏迷脉膊殆ド觸知スル能ハザル仝患者ニ穿顱術ヲ施シタリ、即チ兩側顱頂部ヨリ各五「マルク」銀貨大ノ骨片ヲ鑿除シ頭蓋底ノ方ニ「ガーゼ」片ヲ深ク挿入シ置キタリ、術後ノ經過ハ良好ナリキ、即チ三日ノ後腰部穿刺ニヨリ得タル液ハ只微ニ溷濁スルノミ、六日ノ後ニハ全ク透明トナリタリ、患者ハ凡ソ十日ノ後發語ヲ試ミントセルニ全然失語症ト失書症トヲ起セシコトヲ發見セリ然レドモ諸症日ヲ經ルニ從テ消失シ四週ノ後全ク健体ニ復セリ。第二例ハ脊椎管ニ或手術ヲ施シ上行性腦膜炎ヲ起シタル患者ニ仝樣ノ手術ヲ試ミタルニ精神ノ昏迷及頭痛ニハ好影響ヲ與ヘタルモ數日ノ後患者ハ鬼籍ニ上リタリ。（外科中央雜誌千九百五年第三十號）

＊　＊　＊　＊　＊

志大業者必擇所任。　抱大器者必擇所投。
是以梁江湖不取蠹殘之木。　釣鯨鯢適兩盈之溝。

＊　＊　＊　＊　＊

漫錄

○沼津舊記

池部雨橋

一

今茲、四月二十日午前十時頃、藍青の如き奔流の淙然たるを前にし、後ろの水車小屋に、米つく音の面白きを聞つゝ、小さき坂の傍、辻堂に隣れる松か根に、色青き男の藁草履はきて、洋杖持ちたるが腰かけたり。

此處は駿河の國、沼津と三島との間、清水村といふ百戸の小村にて、かの男は、物語る我れなり。

二

何故君はかゝる所へ來しと問ひ給ふか。

ろは君彌生の末つ方なりき、いさゝか肺を病みて、世をも人をもはかなむ思ひの、絶ゑずわが胸に領したれは、美遊も惡歸に若かずといふ青邱がから歌ふところにして雨城の君春雨の君にさらばよと、春風一百五十哩程、越の朝風身にしみて、とゞめも敢へぬしはぶきに苦みしを、夕は若櫻の星光淡く、正蔓寺の晩鐘に人生の恨み長らひきて、母ぞ待つなる故郷の戸に立ちたりしか。

されどいかにせむ、衰へゆく躰軀は雄心ふりれこさむ

に由なく、過ぎし年月の幸うすかりしこと、現當の吾れは秋をも見ずてゆきなまし、されど吾が靈昏うして宗教のきらめきに觸れざれは、限りなき生のいとゞ心許なく、吟心つねに幽暗の黑雲に鎖されつ、日ごろ離さぬ詩卷さへ、清興を齎らさゞれば、月花の詠めもいさ、只物憂かりしと答へてやまむ。

斯くては行衞の沓けきに、命こそげに寶なりけれ、餘り骨肉の同情が君の心を消極ならしめむ、寧ろ風温く水清き地に、放念靜養の兒となり玉へとて、醫も友もすゝむれば、幾たびの夏遊びたかりし富士の裾野に、わがみよりあるを幸ひ、百年の計たつる氣になりて、飄然かの地には向ひたるなりき。

三

裾野の春は筆に盡されずかし。

若し繪ごゝろある君が、吾と共に三脚を据へ給はゞ、先づ畫面にコバルトの天色を塗り給はむ、而してちり雲のほのかに鵝毛の飛ふが如きを見て、水なき海のうす化わひと、何の繪具ときたまふや。

うらゝかなる日影は愛の如く、人醉はしめの眸に似たり、仰けば羽ある童あり、金鈴を搖りて高く雲に入り、雲に入りつゝ尙搖りて、終に杳冥の裡に隱れぬ。

蝴蝶の舞の彩翅袖、ろでのたゆげは櫻かざしけむ大宮人ところ、わが酒痕淚痕の袷の袖と取りかへばやな。

あゝ君、麥の畝のエメラルドの如何に和かく優しきかな、西ぶりの夜宴の姫君に、富士の裾野たぐへ給ふか君。

南の山は近ければ、グリンにレモン黃を混じたまはむ、かの常盤木の箱根ハ、テプルスエローに印度藍ならずや、西の遠きは空色の淡青なるべし、山陰に群青を用ゐたまはゞ、山波眞の如く活きむ。

四

東海道は、左、かの火見梯子のところより、ますぐに、右、三島に走る、昔のまゝの松原、繪ありげなれど、金紋先箱の行列、今は辻馬車とかわりて、喇叭の聲のどかに聞こゆ。

菜の花の黃なるもよし、蓮華草の紫なるもよし。

紫も黃も、雲と棚引く美しさを奈何に賞せむや。

遠き森に幟のはたゝき、遠の村に白壁見へて、駿河伊豆の大野は、エーテルの波細やかに、かげろうたち昇るなり。

五

小き村の娘の、おの〳〵背に幼きを負ひ、花に遊び花に暮して、花の家土產双の手に吊しつ、唱歌して村に入り行けば、春草に放たむとにや、管笠の男は靜々に裸馬牽きて來りぬ。

珍しきは蒲公英の多きことなり、この地正月より咲くと云へど、春盛りなる今も尙、人行く路を飾りて、さながら黃金ほろ道辿るやうなり。

六

野に幾千万の花咲けば、花に幾千万の虫あり、渠等ゑあまり蜜に醉ひしや、ひねもすむげに飛び廻れるのみ。

大氣動かず、雲飛揚せず、そらの笑みと地のよろこびと、ひとしく滿つるうちに、吾れわたゝ空漠たる懷ひを抱いて、自然の大畫圖に對するなりき。

七

是れよりふさひたる名なきは淸水てふ村名ならむ。

全村を擧つて數十百泉、人間至る所沸々たる噴泉を見るなり。

小さきは針にて突きし穴より湧く如く、中頃なるは蟹の泡沫を吹くにも似、芹の根許を鰌かと見ればそれも湧く水なり、鯉の水吐くやうなるはやゝ大なるに屬す、面白きは一家族の如く五つ六つ群れ居て、此處にも彼處にもおの〳〵割據せることなり、最も大なるは巨砲の筒先の如く砂礫を黑雲のやうに跳ね飛はず、そのむら〳〵と立ち登りし砂礫の、やがて落ちくる時、更に第二の涌湧は、底なる黑雲を蹴散らして、爆然天ゑ冲するの勢あり、地下に人の住まへるか、地の呼吸するにや、見つむればこぼ〳〵と音して、恰も地底ゑ笑へる樣なり。

八

淸水につきて思ひ出せしは彼の藪蔭の水車小屋に流れ入るいさゝ小川なりけり、ろは幅一尺ばかり、深さも亦仝じけれど、水の淸澄玻璃の如く、透徹鏡に似、而かも兩岸の蓮花のはなは鎌鉾形に川と共にうねれり。

徒然なるまゝ、片薄き板もて水車を作り、佐保姫の帶とまがうこの流れに架するに、くる〳〵廻りて扨ても面白しや、雨降らず風溫かなる日は、晝すぎより僑居の六つと四つの女の兒を連れ行き、深綠の荷を敷いて、持て來し水車を二つも三つも仕掛け、一人に一つ宛番をさせ置けば、小猫のやうに圓ろき眼して飽かず眺むる樣、愛らしき限りなり。

身に病と、心に愁なければ、渠等の林檎の頰は笑みに溢れぬ、姉は妹を妹は姉をかたみに相いたわり、嬉々として遊ぶを見ては、春の水の行く末心許なく、われわが影を歎きて、水車守る大供の襟に涙落しぬ。

九

吾の腰かけ居りしは、柿田川の西岸なりき。

柿田とは淸水村の字名にして、さきの百泉を集めて流るゝ、此の川の名にも附けたるなり。

人若し來りてこの川に對せば、川幅の半町にも餘り、

汪洋として大河のおもかげあるに驚かむ、而して皓潔水晶の如きは、世に新らしき水なればなり、喜びの譜を歌ひ行くは生れて樂しければなり。

川上は濶うして湖のごとく、樹影倒に落ち、二艘の小舟に川藻を滿載したるが彼方の岸に横いる、家鴨あり、喝々と鳴きつれて舟のあたりを泳ぐ。

川下もれとらず廣し、されど水は波立ちて急ぐなり。ろの上下瓢のごとくふくれし中央の狹きに架したるを垣橋なれど柿田橋といふ、上流萬頃の水は橋杭とせる石材に扼せられ、僅か二三間の關門を開くのみなれば、押し寄せくる水勢は、跳躍し、奔騰し、劇の背景の如き波形を描きて、轟々物すごく狂ひ乱る、されば底を掘りゆく水の力は幾尋を穿ちけむ、清き譬へむばかりなき水ながら、掬まば掌に色を殘すべし、白布浸さば濃青にや染むらむかと、身も流るごとく覺ゆるまで、立ちても居りぬ。

○白山登山之記（三十二號ノ續き）

米溪生

十二日

闇曙の裡、宿夢既に破れ、牕を開けば、濃霧四方に滿ち、曇鏡に對するものゝ如し、徐ろに庭内を逍遙するに、水煙のうら〳〵と、此處彼處に立ち上り、朝霞深き所に認むる山廓、宛然として畫中の畫なり、沐浴し、朝飯も已に過去に歸しぬ、時は將さに午前六時、約の如く、案内者來りて發足を促す、然るに擔荷未だ全備せず、其の遲滯なるを叱責し、出發の途ゑ就きしは、午前八時二十分なりき、登るさに、社務所に至り、登山料を納め、杖を曳き、數百の石階を踏み、鳥居を潜り、細徑を奥ノ院へと辿る、徑愈々嶮惡、山增々峻嶮、進めば蒼天彌增加はる、半里余にして一溪流に逢ふ、導者告げて曰く、此の水を汲まざれば、他に求むる地なしと、ゆかしさに鯨飲し、又二三の器に貯ひて不時の渴に備へ、進めば愈々深林、時に一峻坂あり、其の傍に一大樹あり、導者指して槭といふ此の木なり、故に此の坂を槭坂と云ふと、尚ほ之れに次ぐを木呂坂、板木坂と云ふ、又た斷崖に木の根生ひ出で、宛然梯子の如し、故に梯子坂と稱するなりと、左方ゑ遠く長蛇の蜿蜒横はる如きは、之れ千嶽ヶ谷に於ける、千丈の瀑にして、數百尋ありと、諺に、山は則ち富岳、瀑は則ち那智と云ふも、千丈は那智より長しと、啻だ名の千古に垂るゝことなきは、知る人の少なきが爲めにして、實は、山は則ち新高、瀑は則ち千丈といはゞ、其の名に於て、齟齬する所なかるべし、實に其の壯觀得

て名狀し難し、尙ほ勇を鼓舞して山腹を攀り、峯脈に達す、老樹、陰森朦朧として、晝も亦晦暝、日光の漏るゝ所、甚だ稀れよ、宿霧未だ乾かず、鳥聲喃々たる外かに寂として耳朶に接するものなし、身神恍惚として、一壺天中に逍遙するが如し、峯を傳ひて檜カ宿に至る、茲に一つの石像あり、朽ちたる鳥居は苔蒸すばかりに其の前に横る、休憩稍々久しふし、又進みて茶釜潛に至る、巨石徑路を沮む、然れども一の岩裂は通行を許せり、峻磴を躡み、細徑澗を迂廻し剃刀窟に至る、此の窟は一片の巨岩壁立して、其の下は一の巢窟をなし、無數の石像其の內に安置せらる、數千の奇石怪樹は其の周圍を礙へ、旅者をして、一時休憩の便を與ふ、茲に快談放語すること、半時間余、再び險を犯して五倫坂を過き、慶松室堂に至る、導者曰く、全徑路の什の五六に達せしものなり、而して堂は不時の危難を避くる所なりと、尙ほ汗を搾りて、別當坂を越え、仙人窟に至る、此の窟も亦奇石相集まりて所々に巢窟をなし、檜松相交はりて、又奇觀あり、時已に正午、窟傍の綠草を氈として、橐中より水器を出して之れを酌み、又握飯を出して之れを喫す、偖に、皆な登山せんと欲する膽力者なれば、意氣甚た壯烈、勇を皷して登り、馬鬣に至る、名の如く路狹隘にして赭土よりなり、馬脊の如く、峭壁直截し、俯して左側を觀下せば湯谷川、眸を右下に移せば柳谷川、万仞の壑下に流れ、今若し一塊土と共に崩るゝあれば、身は粉齏せんのみ、眞に其の峻嶮馬鬣上を行くが如し、實に之れ天下の奇を好むものに非らずんば、安んぞ險を犯し苦を嘗むるあらんや、進む事十余町にして雞冠石に至る、奇石層巖疊をなして懸崖路絕ち、茫然として觀看臺に登上せし如く、正面には御前嶽兀然として聳立し、視野を右轉すれば別山左轉すれば大汝、劒峯、共に整然として隆出し、御前に近く清麗なる不動瀑あり、二條相繼ひて百數尋の絕峭に懸る、別山に近きを布引ノ瀑と稱し、五六十尋の高サあるべし、共に凄凛烈九天に水晶簾を懸くるが如し、遠離聲なしと雖とも、激走飛行巖に觸れ水盡く紛碎四散、烟となり、霧となり、紛々として山谷の霞を見、時に或は、一條の雲霧に組し、風に伴ひ來りて、旅者の面を霞むる事一往一來、瀑聲何れにか隱れて、耳府に接せずと雖とも、投聲轉た百雷の轟さて、沿崖を震動するあるを臆想するに足るのみ、實に其の偉麗壯快なる、名狀し難し、尙ほ崖に沿ふて下り、嶮を躡み遂に七坂に達す、此の坂は甚だ峻嶮滑々、且つ細溪澗にして、登上するの困難なる所なり、此の嶮四季累雪する所なるも、前年に亘り降雪少なき爲め、片雪も存せずと導者物語れり、勇を鼓して上れば、一小池あり、千蛇カ池と云ふ、千古より死水

を以てし、人若し之れを穢すが如きあれば、白竜勃然として黒雲を招き、暴風激雨を釀し、其の行旅に危害を與ふと云ふ、茲に休憩談笑稍々久うし、歩を嶺頂に轉ず、山増々峻絶、其の間奇卉異草のみにて一喬木なく、繁茂自ら別なり、或はつばな混りの菫あり、車百合、黒百合、福壽草、共に妙齢の秀芳を競ひ、姫百合亦姫君然として、草卉と其の艶を爭ひ、奇觀壯絶、宛然天園の名に背かず、又上ること數十町にして、山増々峻烈、嶢石赭土のみにて、百草及ひ五葉偃松、所々に纏綴せり、歩の轉する毎に絶嶺に近倚る。時に一平原あり、之れを五色ヵ濱と云ふ、遠望すれば、白雪は皚々として水尻谷に横り、之れを忍びし渇を癒するに足らんと、互に競ふて疾走し、平時見難き諸先生の飛行の健脚も、此の時に非らざれば見得べからず、此の時は實に眼中に雪た雪片あるのみ、至りて雪を手にすれば、未た喫せざるに心骨爲めに寒く之れを口にすれば晝間の暑さも何時しか忘る、實に此の渇を醫するに當り、金玉何ぞ此の一片雪にしくものあらんやと、又即席人工ラムネを造りて、飲んで其の飽を忘るゝに似たり、之れより歩を移して、五色ヶ濱を過き、室堂と云ふ一の庵に達す、時已に午後四時なりき、

室堂は奥ノ院の南麓十六町にして、間口七間、奥行三間余、大小の二室よりなる、大住居は粗にして旅者の泊する所、雹だ雨風を凌ぐに過ぎず、小なるは、即ち山守鈴木重太郎の宿る處なり、嘗て先行者に依れば、重太郎は天眞爛熳にして、高談壯語をなすと、之れに謀れば小室を得る事又難からずと、則ち就て謀れば、其の好遇云はん方なし、誘はるゝ言葉に、奥の十疊とも覺しき小室に通れり、山守薄縁（ウスベリ）など、上座とも覺しき所に敷き、盛なる歡迎をなすにぞ、入りて坐せば、麥茶を汲んで勸めたり、茲に於て擔荷を開き、晩餐を喫す、食ふては話し、話しては食ひ、食盡くるも談の盡くる事なし、談笑酣なる時、杖を奥ノ院に曳く、其の途、阿彌陀ヶ原と云ふ所あり、石碑二三今尚其の形跡を存す、進むに從ひ滿嶺乱崖、千巖起伏、人をして今更に造化の奇に愕然たらしむ、上るに路崎嶇として頗る峻嶮、一歩に一憩、勇を鼓して遂に絶頂に達するを得たり、嶺に一小祠あり、之れ今年再築せるものにして、土壤を堀り乱崖欹嶂之れを圍繞し、數世に倒るゝ事なく、風雲の害を凌がんとするは、甚た奇なりと云ふべし、

此の祠は、養老三年七月三日、越前の僧泰澄大師、白山の靈に祈願する所あり、依て諸、冊、二尊ト菊理南媛命を御前岳に、大己貴命を大汝嶺に、大山祇命を別山に祀れり、其後、僧南嚴坊の勸誘により、藤原秀衡は五尺の金銅像を鑄て、之れを納む、然れとも後災の爲め之れを

失ひ、現時は三祠共に神鏡を以て靈代となすと、又傳ふ、壽永二年本會義仲奥ノ院を再築せりと、果して書せる如くんば、白山と高僧名士との因緣深からずんばあるべからず、且つ古は多くの院社白山に隷屬し、山徒其の勢ひに乘じ、屢々國主と戰ひし事共ありと、然れども現時存するは、石川郡河内村に白山比咩神社あり、之れ即ち本神の支社にして、同郡別宮村に別宮神社、越後大野郡平泉寺村、及美濃國郡上郡長瀧村に、各白山神社ありと彼の白山比咩神社の如きは、遠く欽明の朝にありと云ふを見れば、本社は已に泰澄大師の開山前に在りしと云ふを得べし、而して白山は毎年七月中旬を以て開扉し、九月上旬を以て鎖すものなりと、祠の北傍二三十歩の所に、明治十五年内務省地理局の建設にかゝる、一基の測量標あり、其の西南三町余に御寶倉とて石殼累積し一丘をなす、實に偉觀あり、此の嶺は、東經百三十六度五十分、北緯三十六度七分にして、其の山麓は六十里を回ると云ふ、高さ八千九百尺の高嶺にして、帝國の一大火山脉なり、古より越の白根と呼ばれ、或は芙蓉の峯と稱せらるる所以なり、古今集に、

きゝはつる時しなければこしぢなる
白山の名は雪にぞありける、

後撰集に、

都までしるにふり來る白山は
雪つきがたきところなりけり、

此の山は、實に單獨なる一山なるが如しと雖とも、其の實五峯相連りて一大彙をなすものなり、其の最高を御前岳、前に稜々崖岩を綴るは劍ヵ峯、左に凸兀たるは大汝嶺、三峯共に岩山にして、其の頂には樹木生ぜず、別山と三峯は其の南にありて、巔層に眞砂を散じ、雜樹も亦繁茂別なり、今若し天氣晴朗に、歩を別山に轉ぜば、東方遙かに御嶽に近く、富嶽の高巒を髣髴の間に瞻望し得べしと、此の五峯は延元の始め、白山噴火し、天文十六年再燒け、次て其の二十三年破裂最も猛烈を極め、石を飛し巖を崩し、此時五峯を立つと、今絶頂に登りて双眸を放てば、此處には、大汝山と劍ヶ峯との間に、宛然瑠璃の如き翠ヵ池深々乎として、其の深さ幾尺なるを知らず、大汝と御前との間には、千秋の積雪を以て封ぜられたる千歳ヵ池、劍ヵ峯と御前との間には紺色を呈する紺屋地獄、鍛冶屋ヶ池あり、其の他遠く尚ほ御手水鉢池、油池等あり、之れ等諸湖の如き、以て其の噴火口の舊跡なるを知る、東方彼處に最高峯をなすは、飛彈の御嶽にして、堆然雲表に聳へ、君子の風情あり、其の左方に峙つは信洲の駒ヶ嶽、隣れるは乘鞍山、宛も鋸齒の觀あるは鋸山、鎗の如く鋭きは鎗ヶ岳、遠く一平野を隔てゝ歴

々相聳立す、眸を左方に轉すれば、越中の藥師山、鑓ヶ岳、立山、大日岳、大蓮華山、雪倉山、の諸山蜒々山巔を綴りて一脉の如く、獨り兄弟たる立山は、鑓ヶ岳の半腹より屹然として銳巔を表はす、又眸を連山の左方に轉ずれば、漠々乎として一物も眼に遮るものなし、眸を南方に轉ずれば、越前の屏風山兀として雲表に表はれ、其の他の諸山兒孫の如く起伏し、平野に於ける諸市諸村の如きは、網膜に映ずるに至らず、啻だ越前の小舟渡、日野の河畔に沿ふて映するのみ、雲は美濃の一帶をかすめ、大海の波濤の如く、或い竜となり、或は砲煙の如く高まり、其の臭きは嶋嶼の如し、實に其の變化出沒極りなしと云ふべし、飜りて金澤市街を眸觀せんとせしも、山障に蔭れ啻だ河北潟、柴山潟、今江潟、木場湖の四湖一片翳の如し時に夕陽團々乎として西に趣き廣漠たる日本の蒼海は一葦帶水を隔てゝ遠く露の烏港を望むが如く將さに虞淵に沈まんとする時は西天一帶紅色を帶び恰も日章聯隊旗の如く光輝放散し海水も之れが爲めに金色を帶び五彩に摸色せしが如し此の山の陰映は飛彈の一國を暗裡の内に納め其の壯麗美觀ゴルドスミスを地下に招かんよりは得て其の秀景を摸すべからず氣候亦頓に變じ躰に數重の衣を着くと雖寒冽肌に徹す歸るさに氷輪皎として東山の端より輒り出で愉と吟じ快と詠じ舞ふが如く笑ふが如し其景又一奇觀あり、室堂に投ぜしは時將に午後七時、諸共に冬服に着更へ爐を圍み互に相談笑するに、山守流石雲の上人、人に對して快談放語以て何等の虛飾あらん復た何の邪念あらん復た何の僞善あるなし、實に天眞爛熳斯意以て神明に對すべく此の心以て宇宙に繫くに足るべし、談酣なる時薪煙一室を燻らし其の苦悶言はん方なし、戶外に清鮮を求めんとすれば弦月は皎、寒風は颯として來りて衣袂を拂ひ、四隣寂莫として一虫聲だになし、詩など吟じ逍遙一町程にして湧泉の下に至る、水波瀲々たる所には皎々たる月光水に映して金波を漂はし珠玉を弄する如く將た水晶の玉を碎くが如し、其景得て云ひ難し、手を差し入るゝに心骨之が爲めに寒く、指尖爲めに氷凍せんのみ、汲みて利母那泥を作りて酌むに其壯絶言ふべからず、毛布に包まる、談笑何時しか夢と消え、三々、五々、列を組める登山者の聲に、夢を破りし事屢々なりき、

十三日

寒威冷然肌膚に碎して夢を破る、時將さに午前二時頃なりき、爐を擁し暖を取り煙に燻られ談笑壯語、時已に四時半、鈴木重太郎を案内者とし奥ノ院へと詣す、時は寒氣凛冽心骨に徹し、面を刮り恰も寒山氷を踏んで狡兎を追ふの期節と異なる所なし、弦月は清らかにして西に傾き星と其光映を爭ふ、幽又幽、邃又邃、其處彼處徘徊す

る內東山漸く菫色を帶び、周圍の山巒又一面に青醒めたる濃藍色を呈し、實に秀麗なり、寸時にして景又一變し、東天一帶薔薇色を呈し、周圍の山巒は崎嶇として藤色を呈し、平野亦紫藍色を呈して其の豐饒を表はす、遂に東山燃ゆるが如き光景を呈す、時已に午前五時十二分朝陽赫々として旭の御旗の如く鋸山の絕巔より輝き渡り、一天雲晴れて片翳なく、三十有余の登山者を照せり、

我等は彼の登山者の如く、奥ノ院に詣でゝ願ひを結ばんなどの世俗を學ぶに非らで、山秀で水清き幽邃閑雅の地を踏みて、積日の鬱を散ぜんとの願ひに外かならず、然れば四五の風流人士を除くの外かの掌を押し合せ一心不乱冥福を祈願するの狀、又は聲高々に南無阿彌佛の唱ひ事せんなど、興に興を添ひざるはなかりき、眸を轉すれば、碧茫々たる日本海と漂渺として水天に連なる所、俯して見れば、二三の點在する湖水、又は遠く右に射水の流は一條の帶の如く、近く左に日野川の横はるなと、壯嚴を極むる事前日の比に非らず、勝百倍を加ふ、昔より云ふめる、智者は山を愛し、仁者は水を愛すと、豈偶然に非す、山の泰然として動かざる智者の智あるが如く、水の流れて止まざる仁者の仁を施すに似たり、我れ智者に非ず仁者にあらねど山水を親愛する今更に非ず、山の愛すべきは自然の風景天然の美觀人を欺かず、且つ千歳易らざるにあり、と賞して室堂に歸りて炊ける飯を喫す、山頂氣壓低きが故に全飯に至らず、半米半飯俗に言ふメッコ飯なり、然りと雖ども空腹何ぞ此の飯に若くものあらんと、食遂に了へ仕度早々轍を踏んで下山の途に就きしは午前十時なりき、登降の途一なりと雖、其の景又一ならず、裏景の却て風景を添へ、疲勞も亦登山より感ぜざる事數倍、正午零時半白山温泉に至り、山田屋に登上して晝餐を喫し、午後二時半出發し、再び不動の靈泉を見舞ひ掬して午後六時五十分白峯村に着し、再び旅館永井に投じ、浴食共に了へ、枕に就きしは午後十時頃なりき、（其行程九里余）

十四日

時ならぬ人音の耳に留まるにぞ、夢境を破りて靜聽すれは、先生の交話なり、前日の疲勞あり、且つ嗜眠の愛線に驅られ、眼はさだかならす、さりとて唯だ獨り朝寢を貪るべくもあらねば、愛線を斷ちて起床せしは朝六時なりき、食了りて握り飯を命じ、之れを橐中に納め、出發せしは午前八時半なりき、山路を辿りしが、途甚嶮惡、步武を福井に取りぬ、戸森村に憩ひ、板休谷に休み、石川福井の分界線谷峠の絕巔に至る、路の右側に國境標あり、其の筆蹟消滅して其の何たるを辨ぜざりき、今日も亦連日の晴朗に組し滿空に片翳なく、松柏岾崛として、唧く

虫、啼く鳥の聲など、聞くにつれ樂園に歩を弄するが如し、其の心地のよさ、旅せぬ人の豫想し得る所に非ず、高隅に打倚れば、勝山市街を俯して眺むるに足り、諸山左顧右眄の間に隱顯するも憎からず、此の路には、負手、擔手の往來甚だ多く、興一向を加へぬ、谷峠より福井に入れば、山路甚だ擴く、且つ平垣、石川縣内の道路と全く其の趣きを異にし、禽蝶に伴はれ節を郊外に曳き軟風面を拂ふと異なる所なし、時に路傍に一落泉あり、杉樹の蔭に清涼を求めて、嚢中の飯團を出して偖に喫す、一片の肉なしと雖其の美味以て煩勞を癒するに足れり、又笹の葉を綴りて、泉水を掬し、口渴も之れが爲めに癒するを得たり、谷村を去り、河合村を過ぎ、山又山、村又村、川又川を見送り、又見送られつゝ、中尾、折神谷、寺尾、猿倉の諸村を經、午後四時勝山に至り、一小茶店に投じ、休憩暫時再び歩を轉じて小舟渡（ヲブナトウ）（藤卷）に至り、滔々たる碧流に逢ふ、之れ過日の霖雨洪水を釀し船橋遂に流失し、今は啻だ二片舟の對岸と往來するあるのみ、時に日未た曛れず落暉山にあり、一片船に搭じて碧瑠璃の如きを渡るに、水光鏡より美に、對岸の綠柳整然として影を蘸し、水澄澈にして水底之れが爲めに瀝然たり、魚介は吾等を慕ふものゝ如く、船圍に集ひ來りて舞ひ遊ぶなど、風景壯絶、慕ふて此の碧水を横ぎるに非ざれど、風光明媚の地多き、若し奇勝よ靜養を求めんと欲せば、必ず茲に幽を探らざるべからず、棹を投じて徐々に對岸に移り、河畔の小旅館、小島に投宿す、時已に午後六時三十分なりき、窓推し見れば暮色愈々近づき、衆鳥高く飛び盡し塒を爭ひし小鳥も、小枝にろよぐ涼風にとれて、何時しか夢を結びけん靜まりて聲もなし、河畔に釣する叟も歸り去りて、殘されし小舟のみ漣漪に弄ばるゝなど、又路頭に點綴せらるゝ柳の梢より殘照微かに反映し、薄暗き煙の幙は山麓を霞め、彼方の寒村に星かと見まがふ計の燈は、幽かに閃めき、響く水の音、嬌女か奏づる琴の調に似て、いとゆかしかりし、蟬の時々すだくなど、夏の間の露の命を寄せぬと思ひば、感應力の敏なる我等の爲めには、又涙の種なりき、實に此の景なくば、夏日の暑も堪ゑられまじ、苦中にも亦樂あるらめ、時に下婢膳を齎し來る、鮮鮎の美味なる云ふべからず、食後就床して何時しか夢境に入りぬ、（其行程九里余）

十五日

早や翌日となり曉近し、窓推し見れば、連日の好天に引き換へ、濃霧吾が四邊を霞め、愈々其の度を高めし如き感あり、朝餐も畢へ、午前六時二十分出發の途に就く、談笑徐行中嶋を過ぐるに、冷風颯々涼しといはんよりは寧ろ冷かなり、清水村を過ぎ、轟に至る頃をひ、鬱天頓

に變り旭日眩ゆく輝き渡り滿空一翳だになし、天の此行に恩澤を與ふるゝれ幾何ぞや、轟村より杖を山徑に辿り一嶺を越ゑ新谷村に至る、此の山は峻嶮にして細徑啻だ樵夫の攀るあるのみ、されば其路一ッならず、或は谷を横きり到る處を失ふもの數條、故に樵夫に其の道を尋ぬれば、此の道横に入るべからず、巖壁に當れば必ず其の右方に出でよと、逢ふ人毎に注意を受けぬ、言に從ひ攀づれども、細徑又細徑數あり蔓又纏ひて其の行を鎖す、然れども肉薄遂に絶頂に達するを得たり、閑谿の間に孤村の遠影見ゑ又隱る、丁々たる伐木の聲もこゝかしこに聞ゑぬ、下りて遂に新谷村に至るを得たり、斯くして三里の迂廻遠路も僅か三十町程にて事足れり、然れども登山勞後の又登山、例令瘦山なりとても其の困澁筆紙よ盡し得べくもあらず、遂に新谷村を經て志比村永平寺の門前中村屋に投ず、時已に午前十時半、和服を着け換へ、案内者を求めて永平寺に詣づ、

永平寺は曹洞宗の大本山にして、其の宗祖は承陽大師なり、大師は正治二年正月二日に生誕し、齡五十二にして亡き人の數に入り、明治卅五年が六百五十年の法會に正當せり、偖て日本現時の宗旨にて、一萬以上の末寺を有する大宗門は、眞言宗、眞宗、曹洞宗の三門なり、眞言宗は、古義、新義の二派に分れ、眞宗又十派に別れ、信徒も從て分派せり、獨り曹洞宗にありては、混然一致派別なく、一萬四千の末派を有し、信徒の數は約八百余萬ありと、啻た能州に一本山ありと云ふが如きも、永平寺の支派なるが如し、世上にて祖師は則ち日蓮、開山は則ち親鸞、大師は則ち弘法と世評甚た高し、然るに斯く高からざれども、越前國福井城下を距る四里の深山幽谷なる一寒村、然かも四月積雪尚未だ解けざる所に、斯く終世依然として盛壯を極むる、蓋し故あるべし、之れ其德高きに由來せるものなりと、大師其の性、意氣英邁にして才智あり、深く名利を願はず、名宗高僧の大師に參禪し、佛敎の眞意よ開通し、眞正の佛敎を布敎し、勤王誠忠にして、傑出の門弟を出し、僻地の道門より八百餘萬の檀信徒を出せり、之れ其の盛大を極めし所以にして、又終世不易の端緒なり、而して今は其の末孫久我候ありと、

案内者に導かれ、永平寺内を觀覽す、此の寺は落寞たる山廓に綺麗なる現時の堂宇連立し、總棟數九拾余、此の坪數貳千七百八十余ありと、何れも偉觀を呈せり、其の周圍には老樹諸所に繁茂し、庭前に小河緩く流れて、水清く山秀で、洵に幽邃閑雅、勅使門を見、山門に至れば、讀經の聲、木魚の音、時々打混る鉦の響、寂寥無常と響くなり、中雀門、僧堂、佛殿、承陽門、拜殿、承陽殿、

孤雲閣、法堂、妙高臺、不老閣、瑞雲閣等を觀覽す、承陽殿の奥には畏くも　天皇陛下御眞筆（承陽）の額あり、離れて從一位岩倉具視筆（承陽殿）の額あり、其の他永寶年間納められたる唐銅の鯱、其の他五百羅漢、彫刻の精密、廻廊の壯大、奇門の雄麗など、又經書の類等、一ッとして詳しく研究すべき價を有せざるものなし、旅舍に歸り晝餐を喫し、仕度早々出發し、荒谷と藤島村との新道を過ぎり、福井市に至る、其の間、所々に涓々として畦畔を流れ來る水中には、三々五々列をなして魚の舞遊び、目には見て手にと捕る人もなし、其の風情いと幽し、藤島村に至れば、今は恰も此の鄉の孟蘭盆にて、常は人無き通路も一入喧しく、男女老若馬車の往來織るが如し、逍遙遂に停車場に臻る、時已に午後六時、旅館に投じ夕飯を喫し、午後七時二十五分下りにて瀧笛一聲歸路に就きぬ、其の途次、雷光宇宙を裂くが如く人をして今更に造化の奇に愕然たらしむ、驛又驛を過き、小舞子に至れば、海水浴者の歸澤するもの甚た多し、一聲の瀧笛と共に金澤なる第二の故鄉に着せしは、午後九時十分なりき、諸先生と別れを告げ、歸宅せしは午後十時、此の夜金澤にて始めて聚雨に會す、實に幸運なる旅行と云はざるべからず、（其行程九里半余）（結了）

○秋季雜吟

菊か香に君懷しき夕かな　在樹
日暑からす風寒からす蕎麥の花　仝
夕日さす千丈瀧の紅葉かな　仝
水底を走る雲あり秋の風　仝
芋の葉の露弄ふ童かな　仝
名月や山峨々として水淸し　仝

英國海軍の來航と聞きて

秋日和佳賓迎ふる埠頭かな　仝
雞頭の障子にうつる月の前　笙
踊子の月を脊にして戻りけり　仝
月天心叢雲西に迫るなり　仝
山門に仁王いきまく野分哉　仝
つのりつゝ遂に夜明けし野分哉　仝
明月や枝豆味ふ椽のさき　一星
堀出しの南京瓶や薫る菊　仝
刈取りの鎌の力や露の音　仝
隨筆の栞にちぎる野菊かな　仝
霜の朝茶の味よくて渡る雁　仝

＊　＊　＊　＊　＊

貧不足羞。可羞是貧而無志。賤不足惡。可惡是賤而無能。
老不足歎。可歎是老而虛生。死不足悲。可悲是死而無補。

＊　＊　＊　＊　＊

呂新吾

會報

○叙任及辭令

六月十四日
雇申付
月俸金八圓給與
解剖學副手ヲ命ス　黑田又次郎
六月十七日
入學志願者選拔試驗數學科試驗委員ヲ委囑ス　河合義文
仝　上（漢文學科）仝　村上珍休
仝　上（國語學科）仝　藤井乙男
仝　上（物理學科）仝　西英盛
仝　上（英語學科）仝　田部隆次
化學　教授　高山基重
獨乙學　仝　湯目隆績
入學志願者選拔試驗（頭書）委員ヲ命ス　宮田篤郎
入學志願者體格檢査醫員長ヲ命ス　副手囑託　三木三郎
月原秀範
計見雄藏
關啓次郎
上野忠
猪木彦輔
入學志願者體格檢査醫員ヲ命ス　助教授　福見常太郎
雇　宇野益之
入學志願者體格檢査委員ヲ命ス
六月二十一日
依願囑託ヲ解ク　劍道教授方囑託　石川龍三
七月二十一日
金澤醫學專門學校教授醫學博士　金子治郎
七月二十二日ヨリ日數十一日間ノ豫定ヲ以テ解剖學取調ノ爲メ大坂府岡山及福岡ノ二縣下ヘ出張ヲ命ス
七月三十一日
依願囑託ヲ解ク　內科學副手囑託　三木三郎
八月五日
內學科副手ヲ囑託ス　醫學得業士　林篤
月手當金貳圓給與

九月一日
會計課附ヲ命ス　雇　山口克巳

九月八日
醫學科第四年級　教授　下平用彩
仝　第三年級　仝　宮田篤郎
仝　第二年級　仝　上田計二
仝　第一年級　仝　石川喜直
藥學科第三年級　仝　櫻井小平太
仝　第二年第一年級　仝　高山基重
右頭書ノ級長ヲ命ス

九月八日
物品檢閲委員ヲ命ス　教授　櫻井小平太
仝　村上庄太
助教授　福見常太郎

九月十六日
本學年間懲罰委員ヲ命ス　教授　山碕幹
仝　金子治郎
仝　宮田篤郎
依願囑託ヲ解ク
自今金拾八圓給與　講師　渡孚貞
雇　增野與三九

九月二十日
講師ヲ囑託ス　小原芳雄
月手當金參拾圓給與　近藤勇記
雇申付
月俸金貳拾圓給與
病理學及病理解剖學副手ヲ命ス　雇　近藤勇記

九月三十日
雇申付　西澤寛次
月俸金拾八圓給與　橋本外次郎
雇申付
月俸金拾貳圓給與
學生課員ヲ命ス　雇　橋本外次郎
藥學科副手ヲ命ス　雇　西澤寛次
依願囑託ヲ解ク　藥學科副手囑託　大櫛秀松

十月九日
解剖學無給副手ヲ命ス　醫學得業士　田村圓四郎
內科學無給副手ヲ命ス　仝　久保田保次
眼科學無給副手ヲ命ス　仝　熊西中藏
婦人科學無給副手ヲ命ス　仝　岡田虎介
解剖學無給副手ヲ命ス　仝　池田省吉

十月十六日
眼科學無給副手ヲ命ス　醫學得業士　吉池省吾

眼科學無給副手ヲ命ス　醫學得業士　奈良八郎
外科學無給副手ヲ命ス　仝　佐崎伊久
十月二十三日
婦人科學無給副手ヲ命ス　醫學得業士　鷲山謙吉
外科學無給副手ヲ命ス　仝　蘆澤孝治
內科學無給副手ヲ命ス　仝　島村伊之助
十月二十四日
內科學無給副手ヲ命ス　醫學得業士　岩砂鈴次郎
十月二十五日
會計課主任兼圖書課主任庶務課主任　書記　山本兵三郎
書記高柳鎌次郎臨時應召解除歸校ニ付庶務課主任
兼務ヲ免ス
保管証書出納立會員ヲ免ス　助教授　松田菊治
十月二十七日　講師　市村塘
藥學科第二年級生徒指導藥用植物採集トシテ醫王
山ヘ出張ヲ命ス
十一月一日
內科學無給副手ヲ命ス　醫學得業士　岡田甚美
十一月二日
內科學無給副手ヲ命ス　醫學得業士　鴨脚光榮
外科學無給副手ヲ命ス　仝　佐野爲明
外科學無給副手ヲ命ス　醫學得業士　杉田治十郎
體操副科劍道教授方ヲ囑託ス　國下太作
十一月六日
依願眼科學無給副手ヲ免ス　醫學得業士　吉池省吾
依願婦人科學無給副手ヲ免ス　仝　岡田虎介
十一月二十日
外科學無給副手ヲ命ス　醫學得業士　須貝璋太郎
雇申付　青木他吉郎
月俸金拾八圓給與
藥學科副手ヲ命ス　雇　青木他吉郎
十月三十一日
依願解雇　雇　西澤寛次
（以上本校）
六月十九日
任金澤醫學專門學校教授　山本三樹
叙高等官六等
六月二十四日
金澤醫學專門學校長兼金澤醫學專門學校教授正五位勳六等醫學博士　高安右人
叙勳五等授瑞寶章
六月三十日

依願免本官　金澤醫學專門學校教授　山本三樹

八月五日

任金澤醫學專門學校教授　松浦龜太郎

叙高等官六等　八級俸下賜

十月二十日

叙正七位　松浦龜太郎

（以上內閣）

六月二十一日

金澤病院醫員ヲ命ス　中條俊夫

月俸金拾八圓給與

六月二十七日

兼務囑託ヲ解ク　石川縣鹿島郡御祖尋常高等小學校醫兼鹿島路尋常小學校醫　藤井溫良

願ニ依リ學校醫囑託ヲ解ク　石川縣鹿島郡御祖尋常高等小學校醫兼久江尋常小學校醫　藤井溫良

石川縣鹿島郡御祖尋常高等小學校醫兼務ヲ囑託ス　石川縣鹿島郡餘喜尋常高等小學校醫　武田久米藏

石川縣鹿島郡久江尋常小學校醫兼務ヲ囑託ス　仝　武田久米藏

年手當金拾八圓給與

七月二十六日

檢疫委員ヲ命ス　林義輔

出務日當壹圓五拾錢給與

八月八日

石川縣金澤病院部長兼務ヲ囑託ス　石川縣金澤病院長囑託醫學博士　高安右人

仝　金澤醫學專門學校教授　山碕幹

仝　小川勝陳

仝　下平用彩

石川縣金澤病院部長ヲ囑託ス　宮田篤郎

年手當金四百圓給與

石川縣金澤病院部長ヲ囑託ス　金澤醫學專門學校教授　櫻井小平太

年手當金百八拾圓給與

石川縣金澤病院副長ヲ命ス　三木榮末

月俸金四拾圓給與

八月十六日

石川縣金澤病院部長ヲ囑託ス　金澤醫學專門學校教授　松浦龜太郎

年手當金八百圓給與

九月二日

金澤病院醫員　菊池文岱
仝　三股梅吉
仝　谷口長松

月俸金貳拾圓給與

十月六日
石川縣金澤病院調劑員ヲ命ス　海津四郎

月俸金拾五圓給與

十月十一日
石川縣金澤病院醫員ヲ命ス　草野佐一郎
齊藤傳平

月俸金拾八圓給與

十月二十五日
依願職務ヲ免ス　石川縣金澤病院醫員　竹多乙三郎

十一月一日
石川縣金澤病院醫員ヲ囑託ス　中川喜平

十一月九日
石川縣金澤病院醫員ヲ囑託ス　吉池省吾
岡田虎介

石川縣金澤病院醫員ヲ囑託ス

（以上石川縣）

○本會役員

（明治三十八年九月）

會長　高安右人
副會長　櫻井小平太
理事　山崎幹
書記　山本兵三郎　增野與三九　崎田誠四郎
代議員　醫四　柴原外男　醫三　太田勘市
醫二　近澤信盛　醫一　吉浦精
藥三　金岡清彥　藥二　丹波橘二
藥一　安孫子芳三郎

雜誌部
部長兼編輯部長　宮田篤郎
委員　松田菊治　宇野益之　野崎芳孝
醫四　笹岡芳名　醫三　野村義雄
醫三　藤井一雄　醫二　池部正鑒
醫二　德久恒治　醫一　福村深敎
醫一　坪田本照　藥三　高保二
藥二　大澤誠一　藥一　酒井謙二郎

講話部
部長　上田計二
委員　金原三郎　醫四　杉部多米吉
醫四　藤井保二　醫三　高野宗重

醫三 中村欣一郎　醫二 酒井碩治
醫二 廣瀨淵龍　醫一 山岸缶
醫一 宮川尙平　藥三 久田德
藥二 前田與三　藥一 荒井倉三郎

遊技部
部長　湯目隆績
委員
醫四 福見常太郎　醫三 久我龜
醫三 志田主稅　醫三 金子義長
醫一 西村貞俊　藥三 欠員
藥二 井口爲四郎　藥一 岩田利三郎

劍道部
部長　高山基重
委員
醫三 石橋三也　醫二 長田八三郎
醫二 田中三彌　醫一 本仙太郎
藥三 吉野新八　藥二 高橋義之
藥一 瀧澤忠一郎

弓術部
部長　村上庄太
師範　楠正可
委員
醫四 原久雄　醫三 谷道清
醫二 中川善松　醫一 折原廣
藥三 手塚甚之助　藥二 實達佐市
藥一 棚田摠一郎

柔道部
部長　下平用彩
師範　青木恭太郎
委員
醫四 福田四郎　醫三 吉田宗一
醫二 吉川友信　醫一 關柳太郎
藥三 新名藍　藥二 津田弘
藥一 原直壽

學術實習部
部長　小川勝陳
委員
司療醫 小原芳雄　仝 林篤
調劑司 三木榮末
醫四 林龍門　醫四 松山清
醫三 太田勘市　藥三 木村和義

茶話會
委員長　小川勝陳
委員
醫四 山本兵三郎　醫四 石橋三也
醫四 原久雄　醫三 平澤嘉圓
醫二 赫尾肇三　醫二 赤祖父廉三
醫二 金子義長　醫一 清水義成
醫一 長井敬孝　藥三 山脇熊人
藥二 數見宗一郎　藥一 上遠野與作

○本年度各學年級長左の如く囑託せらる

醫學科第四年級々長　下平用彩
醫學科第三年級々長　宮田篤郎
醫學科第二年級々長　上田計二
醫學科第一年級々長　石川喜直
藥學科第三年級々長　櫻井小平太
藥學科第二年級々長　高山基重
藥學科第一年級々長　高山基重

○幹生任命式　九月十八日本校濟々堂に於て行はれ、左の如く任命せらる

醫學科第四年生　丹羽直　仝　杉部多米吉
仝　久我龜　仝　石橋三也
仝　柴原外男　仝　原久雄

醫學科第四年級幹生を命ず

醫學科第三年生　高野宗重　仝　佐口榮
仝　太田勘市　仝　小黑仁太郎
仝　佐藤武　仝　吉田宗一
仝　野村義雄

醫學科第三年級幹生を命ず

醫學科第二年生　酒井碩治　仝　岡勝重
仝　辻井禮太郎　仝　小林進
仝　小林唯四郎　仝　伊藤哲一
仝　赤松省

醫學科第二年級幹生を命ず

藥學科第三年生　手塚甚之助

藥學科第三年級幹生を命ず

藥學科第二年生　津田弘

藥學科第二年級幹生を命ず

藥學科第一年生　荒井倉三郎

藥學科第一年級幹生を命ず

○謹んで大西先生を送る

陽春駘蕩、百花爛熳たるの節、吾人が敬慕せる大西先生の我校を去らるゝの悲報を手にせり、想ふに先生が本校に赴任せられたるは明治三十五年の夏頃なりき、爾來一日の如く、温顏以て生等を導き嚴俊以て生等を訓誨し玉ひ、薫陶感化具さに到る、先生の賜や實に大なり。而して今や吾人は先生が鴻恩の万一に報ずるなく、南の方遠き湖國に送らざるべからず、一樹の蔭に雨を凌ぎ、同じ流れの水汲むもみな是れ多少の緣に因る、況んや三年この方高敎の陶冶を受けて海山の恩を蒙りし生等、何ぞ至悲斷腸の感慨なからんや。然れども天なり命なり、聚散離合は

天地の數、吾人の如何ともする能はざる所なれば、吾人今に及んで徒らに婦女子の顰に傚はんや、離別の悲述ぶるに由なく唯痛嘆するのみ。希くば先生攝養益々怠らず自重自愛以て國家の爲め醫學の爲めに盡瘁せられんとを。　謹んで爰に先生を送り奉る。

○大西先生送別會

四月二十九日午後一時、莚を本校濟々堂に張りて聊か微意のある所を表せんとす。先生を始め會員一同席に列するや、學生惣代柴原外男君は沈痛なる語調をもて先生との離別を悲しみ且つ微衷を陳せられ、次で發起人惣代起ちて先生の面前に進み、紀念品を贈呈せらる、此に於て先生は莊嚴なる口調にて叮嚀なる答辭と懇切なる敎訓とを賜ひぬ、此の間滿堂悉く欷歔の聲を以て滿されたり。式終り余興に移るに及び、和氣靄々場に滿ち、暫らくは離別の悲をも忘れて笑ひ。且つ語りしが漸く時の移りゆくまゝに、先生は都合ありとて退場せられんとす、數百の會員悄然として愛別の情堪ねざるが如し。午後六時二十分、女々しき涙をうち振り〳〵、先生の万歳を三唱して散會す。

附記、當日開會に先だち、恩師大西先生を擁して會員一同が紀念の撮影をなし、尙五月一日先生が御出發に際して吾人は先生を停車場まで見送り奉れり。（雨城生）

○大西先生の書翰

（佐々木純一郎氏宛）

拜啓益々御多祥奉賀候陳ば小生過般退職之際目錄を以て御贈與之筥に相成居候美麗なる花瓶今回御送付相成正に落手仕候諸君の御厚志深く感謝致候就てゝ永久紀念として珍重可致候依て乍略儀以書面御禮申上度如斯に御座候　草々

九月二十五日　　大西克孝

尙々卒業生諸君へは一々書面を以て御禮申上兼候に付御序に宜敷御傳言奉願候

○舊雜誌部委員渡邊有壁両君を送る

我雜誌部の事業たる、勞多くして功露はれざるは夙に識者の認むる所、之が余弊は往々雜誌部不振の嘆聲を發せしむるに至る、是れ吾人の常に憂へとなす所なり。

回顧すれば本誌が嘖々の聲を擧げたるは實に明治二十九年。爾來浸々乎として其歩を進め、號を重ぬる茲に三十有九、本誌今日の旺盛と致したるは、一に部長宮田先生が熱心なる執務に因るとはいへ、實に両君が熱誠なる功績に因らずんばあらず、已にして

両君は今や業を卒へて本校を去られ、生等誤り擧げられて筆を本誌に執るに至る、唯非才淺學、其任の全ふし難きを恐る。

然りと雖も、寸蟲猶半寸の膽を有すとかや。吾人亦抱負なきに非らず、誓つて両君の經營功績を空うせず、且つ其の志を亞いで將に吾人の信ずる所を實行せんとす。希くゞ両君、吾人が方針の將來に於て垂るゝ所あらば幸甚なり。

茲に一言を陳して両君の功勞を謝し、併せてろの健在を祈る。

雜誌部委員一同

○木村博士の祝辭演說

去る八月十一日、金澤病院開院式の擧行せらるゝや、舊本校教授たりし醫學博士木村孝藏先生は式場に臨んで左の如き祝辭を述へらる、今其の要を摘錄せん。

本日當金澤病院が新築落成の盛式を擧行せらゝるに當り當局各位の御喜悅は申すに及ばず、縣民一般寧ろ北陸地方住民の甚だ滿足せらるゝ事と推測致します、私も亦兼て本日の盛典に列し滿腔の祝意を表したき希望なりしに特に御招待を蒙り甚だ光榮のことゝ存じ、態々大坂表より參りました次第で茲に謹んで御招待を受けました御禮を申上げます。

私は當病院とは最も深き緣故を有して居りまゝるので現今も尙恰も當院の職員であるかの如き觀念を持て居ります、夫れ故に當院が今日から隆盛になりましたる有樣を見て之を喜ぶの精神も亦恐くば當局各位と敢て差異ない事と考へます、殊に當院新築の立案及決定は私の當院在職中の出來事でありまして、賢明なる故志波知事は其必要を認め我々の建策を容れ、其の案を縣會に提出せらるゝ事となりました、當時縣の財政は別段余裕ありたるにあらざれば數十萬金を投じて縣下未曾有の一大事業とも云ふべき病院新築案の無事に通過するや否やに就ては我々は大に懸念に堪へなかつたので有りました、然るに賢明なる議員諸君も新築の必要を是認せられまして斯かる大計畫も可決されまして、我々が心私かに憂慮せし事は全く杞憂に屬した次第で其當時の我々の喜びは實に譬ふるに物なしといふ有樣でありました、爾來現知事始め當局各位が數年の間容易ならぬ御配慮によりて遂に今日の盛式を擧行する事と成りました。

抑も金澤病院が今日の結果を得るに至りしい勿論其始めある事と存じます、則ち當地方は所謂裏日本の一部にして維新以來百事の進步多くは表日本に讓りました

が、獨り醫學に至りては然らず藩主前田侯は他に卒先されまして西洋醫學を研究せしめられ、病院を設けて蘭人を聘し藩醫津田太田田中松田等の諸先輩諸君が困苦欠乏に堪へ、極めて熱心に醫學の進歩に盡瘁せられた即ち此始めありて今日此喜ぶべき結果を得たる所以と思はれます、故に私は當病院新築の發意者として茲に前述の各位に對し深く感謝の意を表したいのであります。

私は昨夜當地に着した斗りで未だ細かに院内の摸樣を拜觀致しませぬが大体を通觀しました處でも土地の衛生上に適ひたるは勿論、諸建築は宏壯堅牢を極め寒地に必要なる暖房あり、其他病院新築に要する凡ての点が殆んど完備して居るものと存じます、初め新築の案を建てました節に其規摸が餘り廣大であつて建築材料殊に石材木材鉄材等に乏しきやに聞き及びましたから建築上一層御困難でありました事と想像しましたにも拘はらず、斯く立派に竣工致しました事は實に感服の他有りませぬ。

總て世の中の事は何事に關せず不備不完に耐へ能く利用し活用に力むべき事は勿論の事でありますが、之れにも程度がありまして荒れ小屋で千両役者の芝居が出來ぬと同樣、今日の醫學を實際に應用せんには亦た相當の設備を要する事は勿論であります、今や金澤病院の新築は其工を竣へ諸器械等も殆ど具備せられてムりますから、たとひ當院が將來に於て經濟上の責任を有するにもせよ、現在の在校の博士學士等有爲熱心の諸君に由りて此裏日本も今より益々我醫界に光輝を發揚せらるゝ事は毫も疑ひなき事と信じます、即ち今日ハ御當縣のため又當院のためは勿論金澤醫學專門學校及び我が醫界のためにも私は大に祝せざるを得ないのでムります。

前に述べました相當の設備と申す事に就て當院新築の設計上、私の留意しました点を尙一言申し述べたいと思ひます、則ち當院の如きは醫學を研究し之れを患者に實施する所でありまして特に當院の如き傍ら學生を實習せしむる所でありますから、從て建築物の配置等に注意を要します、則ち醫學の進歩に伴ひ將來更に專門科を分ちて之れが診察場等を增築するの必要を生じましよう、夫れ故に今より豫め適當の位置に空地を餘す必要あり、種々の試驗室等研究に關する各室ハ其便宜を顧慮せなければならず、殊に診察場と手術室等の接近を力めなければならないのです、又外來患者をして猥りに病室の區域に混入せしめてならぬ、蓋し是によりて傳染病の侵入を防ぎ且つ諸種の警戒を容易な

らしむる爲めでムります、外來入院両患者の便宜の地に藥局を設けざるべからず、患者出入口と學生出入口とを各別にせざるべからず、曰く何、曰く何を委くに述べませんが、種々の條件より割り出して配置圖を作りました次第で有ります、私は未だ精細の所は拜見しませんが先づ大体と私の愚案を採用せられて居る樣に存じます、左れば當院は將來或は新築者の摸範となす点もあるべく或は他日醫學上此病院各部の配置等に就きまして種々の批評若くは攻擊を受くる場合もありましようが其際には立案者たる私は之を說明する責任を有するものと存じますから特に玆に一言致します。終りに臨み當病院の益々隆盛を祈ります。

○卒業生諸君を送る

白岳山頭白雲起ちて河北湖畔秋風戰ぎ、庭前の梧桐一葉散りて天地己に秋に入れり、此時に當り我校亦有爲の青年を出す者一百余名。駸々乎として究まりなき我が醫學界の進步は諸氏ゞ切磋の學理を以て修得せる敏腕に俟つこと甚だ切なり。顧れば諸氏は克く玄冬素雪の沍寒を凌ぎ、九夏三伏の酷暑に堪え幾多の艱難と諸種の誘惑とを排除して今や卒業の榮譽を負ひ本校を去られんとす。余輩諸氏が既往に於ける奮勵と精神とに感激し、滿腔の熱誠を以て諸氏の光榮を祝し併せて前途の幸福を希ふものなり

余輩今や諸氏に別る、豈に別離の情ゑ忍びんや、然れども學成り業終へて世に出でられんとする諸氏を送る亦快ならずや。願くば諸氏よ、振厲發奮自己本能の發揮を怠らず、勤苦修錬遼遠なる前途の成業を期し給へや。

○卒業證書授與式

九月十五日午前九時より本校濟々堂に於て醫學科第十八回、藥學科第十六回の卒業證書授與式は擧行せられぬ。來賓にハ文武高等官及び卒業生父兄數十名臨場せらる、一同着席するや校長先づ擧式の辭あり、勅語奉讀に次いで卒業生諸君に證書を授與せられ、左の訓辭を朗讀せらる、續いて文部大臣祝詞(山崎教授代讀)、來賓祝詞、生徒總代祝詞、卒業生總代答辭あり、玆に於て式全く了り、別室に於て一同に茶菓の饗應ありたり。

文部大臣祝詞

本大臣ハ諸子ガ光榮アル卒業ヲ祝シ併セテ諸子ガ克ク本校敎養ノ趣旨ヲ體シ益々其學識技能ヲ錬磨シ操行ヲ愼ミ身體ヲ健全ニシ以テ國家ガ諸子ニ期待スル所ニ副

ハンコトヲ望ム

明治三十八年九月十五日

文部大臣　久保田　讓

高安校長の告辭

卒業生諸氏、諸氏ハ多年螢雪ノ功ヲ積ミ本日爰ニ卒業證書ヲ授與セラル、諸氏ノ光榮何カ之ニ如ン、今ヤ諸氏ハ學生界ヲ脫シ得業士トシテ社會ニ出テ將ニ業務ヲ開キ或ハ職ヲ公ニ奉シ己ニ修得シタル學術ヲ應用スルノ機會ニ遭遇シ其得意思フベシト雖モ社會ノ生活ハ甚ダ復雜ニシテ世人ノ試驗的注意ハ諸氏ノ身邊ニ集注シ一爲一行皆其責任アルヲ忘ルベカラズ、抑醫師ノ職タル所謂司命ノ職ニシテ人ノ最モ貴重トスル生命健康ヲ司リ野蠻文明貧富貴賤ノ別ナク之ヲ必要トセザルハナク從テ其職責甚ダ重大ナリ、蓋シ諸氏ノ學業ハ稍間然スル所ナシト雖モ其實地ニ於テハ尙幾多研究ノ必要ヲ認ム況ヤ醫藥ノ學ハ日進ノ學ナリ、決シテ今日ニ安スベカラズ。而シテ醫師ヲ皮相ヨリ見レバ人ノ病苦ヲ除キ生命ヲ救ヒ其歡心ヲ得、勞少クシテ得ル所多ク品位高尙ニシテ實ニ樂觀的業務ナルガ如シト雖モ其裏面ハ決シテ然ラズ深夜ニ夢ヲ破リ或ハ嚴冬ニ寒風ヲ冒シ病家ヲ訪ヒ常ニ苦痛ノ訴ヲ聞キ或ル時ハ糞尿ヲ弄シ或時ハ汚臭嘔吐ニ堪ヘサルヲ忍デ患部ノ診療ヲ施シ特ニ傳染病患者ニ接スルニ當リテハ恰モ軍人ノ戰場ニ於ケルガ如ク身命ヲ賭スルノ覺悟ナカルベカラズ。勞多クメ得ル所少ク寧ロ悲觀的業務ト云フベシ、而モ不良ナル醫師ノ如ク危險ナル者ハアラズ。其一匙一針ハ實ニ生命健康ノ安危ニ係ハル、而シテ商業ノ失敗ハ只己ノ損失ニ歸シ不當ノ裁判ニ對シテハ控訴スルノ道ヲ存ス、獨リ醫師ノ處置ニ於テハ其過誤ノ結果ニヨリ既ニ生シタル癈疾死亡ノ如キ無論再ビ恢復セシムル克ハズ。此ノ如キハ患者能ク醫師ノ良否ヲ選擇スルノ能ナク畢竟多クハ輕信ノ致ス所ニシテ實ニ憫然ノ至リナリト雖モ又或ハ醫士ノ人ト爲ヲ忌避シ或ハ謝義ノ不廉ナルヲ恐レ或ハ危急ノ場合其良否ヲ省ルノ暇ナクシテ遂ニ此不幸ニ遭遇スル者亦少ナシトセズ故ニ諸氏ハヨク之等ノ諸点ニ留意シ益學業ヲ勵ミ品位ヲ高尙ニ保チ苟モ傲慢卑劣ノ行爲ヲ避ケ常ニ仁術テフ格言ヲ守リ患者ニ接スルニ懇切ヲ以テシ貴賤貧富ノ別ナク一切平等ナラザルベカラズ謝義ノ厚薄ニ依リ處置ヲ二三ニスルガ如キハ決シテ良醫ノナサヾル所豈戒メザルベケンヤ今ヤ戰役ハ將ニ平和ニ其局ヲ結ントスルト雖モ爲ニ幾多ノ人士ヲ亡ヒ大ニ其欠乏ヲ來シ國家ハ諸氏ノ世出ヲ俟ツコト切ナリ、諸氏夫レ益奮勵シ能ク醫士ノ本分ヲ守リ陰ニ陽ニ國家ノ爲メ大ニ盡瘁アランコトヲ希望ス、聊カ蕪

辭ヲ陳シ以テ告辭トナス

明治三十八年九月十五日

金澤醫學專門學校長醫學博士　高安右人

答辭

回顧スレバ生等醫學ノ海洋ニ一葉ノ輕舟ヲ浮ベシヨリ茲ニ四星霜激風怒濤ノ襲フアリテ衝突迷津ノ憂多キ此ノ間諸教官ノ懇切ナル扶掖教導ニヨリ辛ジテ斯學ノ一般ヲ修得シ今ヤ校門ヲ辭セントスルニ當リ茲ニ本日ヲトシテ卒業證書授與ノ盛典ヲ擧ケラレ加フルニ顯紳各位ノ來臨ヲ辱フス、生等ノ光榮モ亦何モノカ是ニ如カン、夫レ今日アル所以ノモノハ固ヨリ聖代ノ御餘德ニヨルト雖モ校長閣下幷ニ諸教官ノ懇篤ナル薫陶ト嚴正ナル誘掖トニヨラズンバアラズ其高恩富岳モ啻ナラザルナリ今又校長閣下ノ懇篤ナル告諭ヲ賜ハル、生等ノ任豈夫レ輕シトセンヤ吾國今ヤ將ニ媾和成立シ四海波靜ナラントスト雖吾醫學界ハ駸々乎トシテ日ニ月ニ新面目ヲ披キ歐米ト馳驅競走シ恰モ戰場ノ巷ニアルガ如ク瞬時モ亦轉ジテ息マザルナリ、思茲ニ到レバ生等ノ雙肩ニ懸ル責ヤ大ニシテ其任ヤ重シト謂ツベシ生等不肖ニシテ非才敢テ此間ニ處シ掉操ニ堪ヘ得ル技量ナシト雖モ一意專心斯學ノ研鑽ニ竭シ以テ皇恩ノ萬一ニ報ヒ奉リ今日ノ榮譽ニ應フル所アランコトヲ期ス聊カ鄙言ヲ陳シテ答辭トナス。

醫學科第十八回卒業生總代　岩砂鈴次郎

答辭

金澤醫學專門學校今日ヲ以テ生等ノ爲メニ藥學科第十六回卒業證書授與ノ盛典ヲ擧行セラレ貴顯紳士ノ貴臨ヲ辱フシ併セテ校長閣下ノ懇篤ナル訓辭ヲ賜フ生等ノ光榮何物カ之ニ如カン惟ルニ生等研學精勵茲ニ三星霜今日ノ榮譽ヲ荷フニ至レルモノ偏ニ校長閣下及教官各位ノ懇切ナル薫陶指導ニ依レリ幸ニ生等此盛世ニ生ル自今益專門ニ學ビシ所ヲ實踐シ斯業ノ發達ヲ企圖スルノ重任ヲ負フト雖モ學淺ク才疎ニシテ內外多事ノ今日ニ當リ此責任ヲ完フスル能ハザルヲ是レ恐ル、唯一意諸賢ノ訓誨ヲ服膺シ奮勵斯業ニ從事シ以テ夙夜淬勵此ノ重任ニ耐ヘ此責任ヲ盡サン事ヲ謹テ茲ニ答辭ヲ述フ

金澤醫學專門學校藥學科卒業生總代

明治三十八年九月十五日　西澤寬治

多年苦學の功成りて當日卒業證書授與の榮を得たるもの左の如し

醫學科卒業生

岐阜縣平民　岩砂鈴次郎　高知縣平民　近森村重

福井縣平民　齋藤傳平　石川縣平民　谷澤一郎

石川縣士族　笹田順三
富山縣平民　牛塚榮太郎
岐阜縣平民　中村德藏
山形縣平民　近藤勇記
德島縣平民　中西島吉
石川縣平民　鈴木實
德島縣士族　長谷眞美
山形縣士族　吉池省吾
山形縣士族　有壁一雄
和歌山縣平民　城起吾老
富山縣平民　鷲山謙吉
德島縣平民　河野益躬
三重縣士族　小椋正香
富山縣平民　熊西中藏
埼玉縣平民　鳥村伊之助
石川縣士族　福岡捨雄
富山縣平民　佐野爲明
石川縣士族　千田常外
新潟縣士族　須貝璋太郎
栃木縣平民　井上啓二
石川縣平民　並河權六
富山縣平民　松井源長

新潟縣平民　渡邊疆
富山縣平民　吉田東秀
新潟縣平民　草野佐一郎
石川縣士族　佐々木純一郎
富山縣平民　田村圓四郎
福井縣士族　久保田保治
石川縣平民　來間隆次
福井縣平民　黑田眞岳
京都府士族　鴨脚光榮
高知縣士族　森澤重春
富山縣平民　英軒二
愛知縣平民　中野源一
宮城縣士族　羽田公太郎
兵庫縣平民　安積鼎
愛媛縣士族　岡村俊照
福井縣平民　三崎吉太郎
石川縣平民　金平鐵太郎
大分縣平民　山內兎毛
石川縣士族　伏田金三
新潟縣平民　岡田甚英
新潟縣平民　長井運男
福井縣士族　奈良八郎

山形縣平民　高橋重二
新潟縣平民　杉田治十郎
和歌山縣平民　尾崎平吉
福井縣平民　中川喜平
和歌山縣平民　上田茂
栃木縣平民　谷中黎次郎
富山縣平民　佐崎伊久
新潟縣士族　安田三木
富山縣平民　津田作平
石川縣士族　山下鋲吾
富山縣平民　庄司正義
奈良縣士族　淺利義治
石川縣士族　水上俊三
石川縣平民　杉本恒治
富山縣平民　窪見一久
長野縣平民　甘利昇
山口縣平民　山下重親
富山縣士族　小泉氷宣
岐阜縣平民　森舜司
山梨縣平民　須藤庄太郎
鹿兒島縣平民　平原雲新
宮城縣士族　四倉重篤

山梨縣平民　成澤輝一
新潟縣平民　成田成治
大坂府平民　折口靜
愛知縣士族　福島可輔
富山縣平民　長澤安弘
山梨縣平民　芦澤孝治
栃木縣平民　坂本信一
大坂府平民　彥坂誠一
石川縣士族　藤村敬一
石川縣平民　松尾等
東京府士族　江守武
千葉縣平民　高橋八郎
東京府士族　小町環
石川縣平民　森公平
島根縣士族　一宮重之助
富山縣平民　高橋幸七郎
新潟縣平民　岩崎勝治
長崎縣士族　村尾純昌
富山縣平民　森清吉
福井縣平民　岡田虎介
石川縣平民　池田菱吉
東京府平民　山田伊之助

岐阜縣平民　田邊傳六　三重縣平民　中須熊藏
愛知縣士族　江村正也

藥學科卒業生

長野縣平民　西澤寛次　愛媛縣士族　曾根章
岐阜縣平民　川勝寛三　大坂府平民　八木德太郎
三重縣平民　海津四郎　佐賀縣平民　溝口龍三
靜岡縣士族　稻崎龍助　大坂府平民　貴島喜兵衛
德島縣平民　毛利德基　福井縣平民　湯淺啓一
富山縣平民　福田靜　富山縣平民　村澤金廣
兵庫縣平民　辻實治　石川縣平民　藤坂友次郎
福岡縣平民　金堂圓　石川縣士族　金谷季男

○卒業生諸氏送別會

儼然たる卒業證書授與式の后、例によりて之れを本校濟々堂に開き卒業生諸君を送る。來り會する者校長高安先生を始め諸先生卒業生及び學生等無慮五百名、憾らくば會場狹隘にして會員肩岬相接し両膝相交り立錐の余地なきを如何せん。時は正に午前十時、第一鐘にて學生入場、第二鐘にて特別會員入場、一同着席すれば小川先生起ちて開會の辭を述べらる、麗々しき語調人をして啞然たらしむ、拍手喝采湧くが如し。續いて輕妙なる講談あり、滑稽に交ゆる手眞似足眞似、一擧一動、よくも吾人の腹を縒らしめたる哉、歡呼の爲めに聲は涸れたり、洪笑の爲めに顎い疲れたり、然れども此時配ち與へられたる茶菓は疲れ果てたる下顎を醫するに余りありき。喫茶の騷ぎ稍靜まれる頃、守部君端坐して琵琶歌を奏せらる、聲朗々、抑へつ揚げつ、或と低く或は高く、一調一調いよ〳〵おもしろし、一きは昔を忍ぶの思ひあらしめたり。十一時四十分、小川先生一歩を進めて閉會の辭を述べられ、萬歳を三唱して散會す。

○河野通夫君逝く　時は去ぬる八月五日のゑと也我校五百の健兒は暑中休暇の最中とて各がじゞ山河に避暑せる折柄、誰か又我健兒の一名が忌々しき病魔の虜となりて逝くことを思はんや。醫學科第三年級生徒河野通夫君は有爲の才を以て大志を抱き夙に鄕關を辭して本校に遊び、研鑽怠りなく大に爲す所あらんとせしも天はこの年若き才人に年を假さず幽冥の境に旅立たしめたり、嗚呼悲しい哉。君性温厚篤實、且つ忍耐力に富み玉へり、去春以來痢を患ひしかば友人切に保養を勸めしも殆んど病を知らざるもの〻如く、依然として書を放されざりしと聞く。嗚呼君が病床に横臥して冷酷なる死の來襲を感じ、半生の學業と燃ゆるが如き熱血の幻の如く消ゆかんとせし時、如何に口惜しき涙に悶へ玉ひけん、思ふて此に到れば我等が胸中また堪ふる能はず、噫。

○嗚呼川勝良三君　人生死別より悲哀なるはなく、死別は有爲の青年が中道にして斃るゝを以悲哀の極となす。藥學科第三年級生徒川勝君、曩に病魔の爲めに襲はれて起つこと能はず、鄕里岐阜に歸りて專ら療養を事とせられしも病勢日に危篤に陷り、百方醫藥に手を盡されし甲斐もなく、八月二十九日、二十一歳の夏を一期として空しく白玉樓中の人となり玉ひぬ、嗚呼哀しい哉。

○松浦先生　大西先生を失ふてより此に半歳、今日漸くろの后任として先生を迎ふることゝなりぬ、聞くならく先生は曩に大學に業を卒へ玉ひ、爾來斯道の研究に從事せらるゝこと玆に年あり、今や職を本校に奉じて經驗深き非凡の手腕をもて吾人に臨まるゝ。吾人とこの良師が豐富なる學識と充分なる熱誠とを以て、我校のために盡瘁せられんことを望むや切なり。（八月十五日）

○入學式　九月九日午前八時より本校濟々堂に於て式を擧ぐ、先づ學生入場、次で諸先生の列席せらるゝや、高安校長は莊重なる態度にて學式の辭を述べ、續いて生徒心得の五ヶ條を朗讀せらる、それより在學に關する注意を懇ろに演說せられ、式全く了る。

○入學生

去る七月初旬に行はれたる陶汰競爭の結果、撰ばれ拔かれたる健兒百五十七名。吾人は諸子の前途を祝して光榮ある今日の初對面を欣ぶものなり。乞ふ諸子よ、諸子が鄕關を出づるの時謳ひいでたる「男子立志」の壯句を忘るること勿れ。

今左に入學の許可を得たる學生の族籍氏名及び出身中學校名を擧げん。

醫學科

岩手縣立一關中學	佐藤鄕治郎	岩手（平）
新潟縣立柏崎中學	成田高仁	新潟（平）
北海道廳立函館中學	木下倉太郎	香川（平）
石川縣立第三中學	和田政範	石川（平）
長野縣立飯田中學	松村喜一	長野（平）
新潟縣立柏崎中學	山岸岳	新潟（士）
石川縣立第一中學	織田信義	石川（平）
新潟縣立柏崎中學	宮川尙平	新潟（平）
福井縣立福井中學	田山退一	福井（平）
愛知縣立第三中學	安藤佐吉	愛知（平）
新潟縣立新發田中學	鈴木伊作	新潟（平）
新潟縣立柏崎中學	近藤淸吉	新潟（平）
私立京北中學	宮澤德治	新潟（平）
石川縣立第一中學	渡邊宗一郎	石川（士）
新潟縣立長岡中學	岡村晋	新潟（平）
愛知縣立第一中學	伊藤善次	愛知（平）

私立順天中學　國吉眞才　沖繩(士)
石川縣立第二中學　米永勇作　石川(平)
奈良縣立畝傍中學　吉井勝次　奈良(平)
私立中學島根修道館　上野善造　島根(平)
岐阜縣立大垣中學　小林良二　岐阜(平)
茨木縣立下妻中學　飯田豐　茨木(平)
兵庫縣立姫路中學　秋田仁　兵庫(平)
新潟縣立高田中學　渡邊靜　新潟(平)
福井縣立福井中學　中川久成　福井(平)
石川縣立第一中學　宮城篤珍　石川(士)
新潟縣立長岡中學　關柳太郎　新潟(平)
大坂府立八尾中學　辻埜倭次郎　大坂(平)
私立攻玉社中學　高田茂一　富山(平)
愛知縣立第三中學　大野幸重　愛知(平)
石川縣立第二中學　浦井肆四郎　東京(平)
石川縣立第一中學　山本直枝　石川(士)
新潟縣立高田中學　春山盛道　新潟(平)
石川縣立第二中學　北村一清　石川(士)
愛知縣立第一中學　鈴木謙一　愛知(士)
和歌山縣立田邊中學　浦晴二　和歌山(平)
石川縣立第二中學　高澤冠一　石川(士)
新潟縣立新發田中學　丸山直友　新潟(士)

私立眞宗京都中學　江村研正　滋賀(平)
三重縣立第三中學　廣山壽男　三重(士)
石川縣立第二中學　本仙太郎　石川(平)
三重縣立第四中學　西川英二　三重(平)
岐阜縣立大垣中學　香村政吉　岐阜(平)
廣島縣私立日彰館中學　內藤三太郎　廣島(平)
私立錦城中學　奧田秀的　福井(平)
和歌山縣立和歌山中學　笠松彥次郎　和歌山(平)
愛知縣立第一中學　石川精一　愛知(士)
群馬縣立高崎中學　太田卯三郎　群馬(平)
和歌山縣立田邊中學　富家光雄　和歌山(平)
新潟縣立村上中學　渡邊四郎　新潟(平)
岐阜縣立大垣中學　早野貫一　岐阜(平)
三重縣立第一中學　龜井轍郎　三重(平)
滋賀縣立第一中學　清水義成　滋賀(平)
北海道廳立函館中學　折原廣　北海道(平)
石川縣立第一中學　高桑馨　石川(士)
富山縣立富山中學　福村深敎　富山(平)
三重縣立第一中學　津田次助　三重(平)
愛知縣立第一中學　布目喜多　愛知(平)
石川縣立第一中學　石田九成　石川(士)
富山縣立魚津中學　伊藤精一　富山(平)

岐阜縣立大垣中學　高木喜一郎　岐阜（平）
石川立第一中學　天野彦次　石川（平）
石川縣立第一中學　茨木忠俊　石川（士）
長野縣立長野中學　田中精一　長野（平）
私立京北中學　近藤時男　石川（士）
富山縣立魚津中學　鈴木正孝　富山（士）
山形縣立莊內中學　角田耕六　山形（士）
富山縣立高岡中學　塚本政次　富山（平）
富山縣立魚津中學　長井敬孝　富山（平）
埼玉縣立川越中學　利根川涉平　埼玉（平）
愛媛縣立松山中學　重松盛勝　愛媛（平）
三重縣立第四中學　山際房次郎　三重（平）
富山縣立富山中學　密山總民　富山（平）
石川縣立第三中學　眞館修平　石川（平）
富山縣立高岡中學　吉田正謹　富山（平）
石川縣立第四中學　吉浦精　石川（平）
石川縣立第二中學　平手秀敏　石川（士）
島根縣立第三中學　坂本修吉　島根（平）
岐阜縣立岐阜中學　長屋泉　岐阜（平）
山形縣立莊內中學　大井藤治郎　山形（平）
新潟縣立柏崎中學　關承吾　新潟（平）
群馬縣立太田中學　小暮喜一　群馬（平）

秋田縣立橫手中學　佐々木龜六　秋田（平）
岐阜縣立斐太中學　八賀重藏　岐阜（平）
滋賀縣立第一中學　安澤綱三　滋賀（平）
岐阜縣立斐太中學　寺境壽貞造　岐阜（平）
富山縣立高岡中學　佐渡順吉　富山（平）
埼玉縣立川起中學　忽滑谷三郎　埼玉（平）
廣島縣私立日彰館中學　田濱仙次郎　廣島（平）
愛知縣立第一中學　西川良造　愛知（平）
群馬縣立前橋中學　吉田隆二　群馬（平）
石川縣立第二中學　敷田雄登記　石川（平）
私立京華中學　山口登　栃木（平）
石川縣立第四中學　堀孝信　石川（平）
石川縣立第一中學　坪田義門　石川（士）
富山縣立高岡中學　中川良忠　富山（平）
廣島縣立三次中學　三上利造　廣島（平）
茨木縣立土浦中學　森山豐光　宮崎（平）
石川縣立第一中學　西村貞俊　石川（士）
京都府立第二中學　佐竹秀一　石川（平）
岐阜縣立大垣中學　北村仲兒　大坂（平）
富山縣立高岡中學　武內清作　富山（平）
私立東京中學　杉山貞二　愛知（士）
石川縣立第四中學　中田德二　石川（平）

石川縣立第一中學　荒川正雄　石川(平)
富山縣立富山中學　坪田本照　富山(士)
埼玉縣立熊谷中學　小林友一　埼玉(平)
長野縣立上田中學　塚田三郎　長野(平)
岐阜縣立岐阜中學　渡邊順治　岐阜(平)
私立攻玉社中學　西原愛太郎　石川(平)
石川縣立第四中學　田中信一　石川(平)
富山縣立富山中學　石川玄知　富山(平)
沖繩縣立中學　山田有登　沖繩(士)
德島縣立脇町中學　片山馨　德島(平)
三重縣立第四中學　栢原直次郎　三重(平)
埼玉縣立熊谷中學　渡邊光生　埼玉(士)
島根縣立第三中學　勝部方策　島根(平)
島根縣立第三中學　曾田米三郎　島根(平)
山形縣立米澤中學　小鷹利三郎　山形(士)
新潟縣立柏崎中學　久保田宮太郎　新潟(平)
岐阜縣立斐太中學　中田盈疇　岐阜(平)
靜岡縣立濱松中學　小木秀時　靜岡(平)
私立順天中學　佐々木茂樹　岩手(士)
福井縣立福井中學　柳原隆　福井(士)
岐阜縣立斐太中學　尾崎建雄　岐阜(平)
大坂府立岸和田中學　高儀京治　富山(平)

山形縣立莊內中學　相馬甲五郎　山形(士)
鹿兒島縣立加治木中學　吉井直次　鹿島(士)
兵庫縣立兵庫中學　杉內泰治　兵庫(平)
新潟縣立新發田中學　本間淳三　新潟(平)

藥學科

私立神田中學　荒井倉三郎　東京(平)
私立立敎學院立敎中學　島田民藏　靜岡(平)
富山縣立高岡中學　宮野待之　石川(平)
私立愛知明倫中學　岩田利三郎　愛知(平)
私立大成中學　上遠野與作　福島(平)
新潟縣立高田中學　牛木謙吾　新潟(士)
廣島縣立三次中學　大岩小一郎　廣島(平)
石川縣立第四中學　關戶辰次郎　石川(平)
富山縣立高岡中學　金瀨義章　富山(平)
私立大成中學　伊野波盛益　沖繩(士)
岡山縣立高梁中學　吉野積三　岡山(平)
岐阜縣立岐阜中學　棚田摠治郎　岐阜(平)
三重縣立第一中學　政谷祐一　三重(平)
私立中學郁文館　安孫子芳三郎　滋賀(平)
京都府立第一中學　桂定治　京都(平)
三重縣立第四中學　井上詮俊　三重(平)
私立中學郁文館　堀田文造　廣島(平)

私立大成中學　瀧澤忠一郎　秋田（平）
新潟縣立柏崎中學　小林秀隆　新潟（平）
私立下野中學　原壽直　栃木（士）
福島縣立福島中學　酒井謙治郎　三重（平）
岐阜縣立岐阜中學　高橋耕作　岐阜（平）
私立關西中學　豐川壽嘉　廣島（平）
新潟縣立新潟中學　五十嵐巽　新潟（平）
私立東京中學　神戸初太郎　兵庫（平）
私立成城學校中學　吉田藤吾　茨木（平）
石川縣立第四中學　森善次　石川（平）

○醫學科第一年級々會　九月三十日本校濟々堂ゑ於て初會は開かる。先づ石川先生開會の辭を述べられ、次で高安校長は級會の由來と本會に對する希望とを演說せらる。終つて十全會委員の選擧に遷る（別項參照）

后、茶菓の饗應あり、有志者の琵琶歌、詩吟、劒舞、舞踏等の余興あり、和氣靄然として恰も樂土に遊ぶが如く、十二分の快を盡して散會したるは午後五時三十分頃なりきと。

○第十二回解剖遺体法會　十月七日午後一時より小立野寶圓寺に於て執行せらる、當日雨天なりしも拘はらず參拜者は實に四百名の多きに上れり、式は高安校長を始め職員生徒幷に遺族列席の間に終始嚴肅を以て了りぬ。

因に記す、昨年十月より當日に迨る解剖体は七十四體（內男四一、女三三）にして第一回より通算すれば實に六百六十四体なり。

○天長節拜賀式　金風颯々旭旗を飜し、曈々たる旭日之に映じて端氣宇大に滿ち、歡聲天地に震ふ。下は爪木折焚く杣の宿、磯うつ波にかつぎする海士の苫屋に迨るまで、菊酒酌み交はしてこの佳節を壽きまつる。我校も亦例により職員生徒一同本校濟々堂に列して拜賀の式を擧行し、皇基の無窮と聖壽の萬歲を祝し奉りぬ。

○雜誌部編輯會記事

十月九日、豫算編成會を兼ねて庶務所內に之れを開く。部長宮田先生を始め、笹岡、野村、藤井、德久、池部、福村、坪田、酒井の各委員出席。宮田部長は就任の辭を述べられ、熱誠以て委員と共に編輯の任に當るとの御挨拶あり。

議事

一、豫算は大要前年に異なるなく一同可決
一、從來講讀し來れる新聞を止むる件
一、各委員の分擔を定むること左の如し

醫學科四年級委員　原著

同　三年級委員　會報
同　二年級委員　漫錄
同　一年級委員　通信
藥學科各委員　藥學に於ける全部

一、次號原稿の〆切を十二月二十日と定む

主要なる議事終りて散會せしは四時半なりき（かゝり）

○乙己會　藥學科第一學年全生徒に於て級長贊助の下に組織せられたる級會は名を明治の三十八に因みて乙己と命名し呱々の聲を去ぬる神無月の八日に擧げぬ、同日本會は孤煙肅條たる郊外の秋光を掬すべく天地正大の靈に浴して浩然の氣を養ふべく、且つは今まで振はざりし藥學科の振興を圖り以て一旗幟を樹てんとて悲風肅々たる野田山原頭に開かる。校風の樹立と現時學生の衰頽を歎いて悲壯慨切の演舌を試むるあり、歸路茫漠たる北天を遙に望んで前程万里を歌いつゝ校に歸る、因みに本學年間の評議員に荒井、幹生に安孫子及代議員外一名を撰擧して散會せりと。

○端艇競爭會に出づ　本秋大野河畔に於て開催せられたる四高有志ボートレースの激ゑ起つたる我か校乙己會撰手は、北辰を以て北陸の重鍾と聞こたる四高撰手にその初陣を挑みぬ、號砲一發両校生徒滿目の燒点となつてスタートを出發せるわが乙己會の撰手は常に約半艇身の優勝を以て全程の三分の二位まで進みたる時も時不幸なる哉已んぬる哉整調のクラッチに突然の故障を生じ雌雄未だ決せずして己みぬ、あゝ亦何をか云はむ余は渺たる乙巳會の意氣を感じ將に來らむとする春季のレースに於て天晴れ北陸の月桂冠を手ゑせんとを望むもの、幸に健在なれ、尙當日の健兒は、軸手小林二番瀧澤三番荒井四番棚田五番桂整調酒井舵手安孫子の諸氏なりしと。

○第二年級第一次級會

黄昏の幕は既に活動の万象を包んで乾坤今や寂然剩へに歇なき雨に閉込られし十月十六日獨り、我濟々堂ゑ於て活氣滿々たるものあるは何？云はでも著き我級第一次の級會これ也

上田宮田松浦湯目福見の諸先生を甫め蒐る者五十有餘酒井君が流暢なる開會の辭と俱に啓かれぬ、茶菓は供せられ吾人は先づ之等を味ひぬ、不知一杯の澁茶一片の粗菓吁、それが如何に多大の趣味を誘致せしむるかを。

上田先生　登檀先づ先生が級會に對する意向並に希望を述べられ而して能く懇切に吾人が誤解を指摘矯正せらるゝ所あり最後にのたまはく『余本日諸君に語る可き好談柄を有する莫し故に吾が代表者として蓄音器を携へ來れ

り以て諸君が感興に供せむとす』と衆咸唇邊一種の微笑を洩しぬ

宮田先生　嫣然笑を含んで上られ清朗なる音調もて曰く嘗て讀賣紙上「金澤醫學專門學校十人十色」なるものを散見せり（拍手喝采鼎の如く湧いて爲に聾せむ許り）而して我を評するに壯士肌なる語を以てせりわれ大に我意を得たり我實ゑ壯士肌也蠻から也我をして蠻からたらしめしものは何ろやと玆に先生が過去學生時代に於ける趣味多き歷史を陳られたり

田中三彌君　紅青二色に就て紅は其裡武勇を宿し青は其裡優美を孕むと吾人は先第一着に於て既に々々君が奇拔なる題目に向て珍とし迎ふるもの君は尙語をついで云わく我國旗を彩るものは赤色而已これ將に其勇武一片なるを示すに非るか翻て英國々旗は奈何渠實に紅青二色を以て彩飾せらるゝに非すやこれ既に彼等が勇武と優美とを併有し苟も其一片に遍せざるを表示するものにあらずや然り而して我校々旗は如何と其語氣は勇健なりき拍手喝采一時に起つて堂宇も爲に搖れむばかりなりき

福見先生　先づ言を校風に起さる而して後我校現時の校風に及ぼしろれが矯正法に就て切に吾人に希望せらるゝものありき

辻井禮太郎君　君が得意なる歐文を以て述べらるゝや滿場蕭然として水をたゝへたるか如く吾人をして啞然後に瞳着せしむるものあり君が得意想ふ可し

これにて一段落をつげぬ次に來るものは何!!

吾人が鶴首せし「フオノグラム」は來りぬこれ實に本會の盛況を扶翼せむ爲め親しく上田先生が寄附ゑかゝれるもの先生先づ之を臺上に裝置せられ其傍に立つて「フオノグラム」なる語の解剖其搆造並に由來等親しく吾人が爲に說かるゝ事諄々尙敎場に於ける執鞭と擇ぶ所なく歡笑の裡不知不識理學界の一班を窺ふを得しもの吾人深く先生が好意を感佩すると共に先づ襟を正うして靜聽せむ哉忽ち響く七吋の大砲ならでフオノグラム先づ「君が代」二回を奏しぬ吾人ハ嚴蕭に之に和しぬ、或は嚠喨なる明笛をすさび幽雅なる琴線を奏で或は悲愴腸を斷つの琵琶を彈じ興感胸を撼かす謠曲を謳ふ、狂言を演じては滑稽頤を解かし義太夫を談じては悲憤想を逸らす而して淨瑠璃あり三味線あり一去一來吾人をして應接に遑あらざらしめ回を追ふて彌々佳境に進み髣髴眼前に迫るが如く感嘆禁せむとまて禁す不可るものあり。』

岩井源市郎君　君蓄音器の奏演半にして登檀せらる而して一致團結の必要より級會が緊要を叙述せらる後落語數席興味津々とまて尽きざるものあり

厲君　君は日本語もて夏期休暇歸鄉の一節を述られぬ

福見先生　先生が得意なる謠曲の一二いとど其かみ偲ばれて萬感交々いたりぬ

湯目先生　先生立つて朗に獨乙の國歌を唱せらるもの二流暢淀みなきもの遺に彼地に於ける十數の星霜一意研鑽のほども忍ばれて轉た羨望に堪へざるものあり

茶を啜る音又繁くなりぬ追々各自の隱し藝も現れぬ

嚠喨響き亘たる明笛の音、或は高く或は低くろれが幽玄なる妙韻眞に掬すべきものあり

軈て福引は初められ籤は分れぬ或は咳き或は囁き或者は推察し或者は想象す、乃て高らかに呼揚げられ吾人が視線は齊しく彼方に注れぬ意氣揚々として進むもの悵然として歸る者哄笑し談笑し回一回其盛況に進んで笑聲天に沖せむばかり其光景焉んぞ能く三寸の不律の寫しうるものあらむや、既に會は終りぬ赤松君立つてをはりを告けぬ、吾人は三々五々家路につきぬ、仰げば降頻りし雨は既に熄んで下駄の音かるし月も此盛況に憧れてか今し雲の帳を排せむとせり、さても此宵の夢如何に。記して以て追想の料にもがな　（翠流ものす）

○醫學科第三年級會記

金風颯爽梢を拂ふて氣淸らかに、天はいよ〳〵澄み渡つて菊花の馨ます〳〵高うなつて來た。之れ迄久しくれ流れとなつて居た我が級會も、もーよからうと幹生仲間の心配も其甲斐あつて、遂に空前絶後（？）の盛會は開かれたのである。いで僕は例の色も光もなき筆に寫して聊か追想の料にとも洒落れやうか。

時はこれ十一月の初四日、所はこれ金城々下大手町の本校濟々堂、重なる來賓は校長高安先生を始め級長宮田先生及び小川、下平、石川、松浦、湯目、金原、福見の諸先生で集り來つた會員は百十余名である。開會は午後三時、時間勵行とまで筆太の掲示ありしにも拘はらず、定刻を過ぐること四十分余。時間に掛直のあるは吾が國の美風（？）だから仕方がない。西歐の金言に時は金といふことがあるが、半球を異にした吾が國では時は砂か糞であるらしい。何？　小理屈い止せとな。さらば語らう。

＊　＊　＊　＊　＊

太田委員　劈頭第一壇上に現はれたる君の風采一点の非難なく、前口上も中々落付いて開會の辭を述べられた、「高安校長閣下を始め諸先生が御多用中御參會下されたのは實に〻〻感謝の至りであります」のあたりお世辭も一寸上出來であつた。

宮田先生　拍手喝采の裡より登壇せられ、滿面に笑を湛ゑて曰ひ玉はく「我が三年級ほど品行の善良にして成蹟の優等なるは既に己に識者の一般知る所、而かも智育

と德育との程度は他のクラスに比して落第者の少數なると團結心に富めるとによりて認知せられ、体育も亦完全せること昨日第四高等學校に於て行はれたる運動會の優勝が正しく之れを証明する所である（拍手喝采湧くが如く滿場爲めに搖れむ計り）……」との御賞讃に預つたとき、一同赧顏の至に堪へないやうに見受けられた。先生は猶語をつぎ玉ひて「諸君は幸に現時の位置を誤るなく、堂々たる人物として社會に出でられんことを希望するのであります」と懇切なる訓戒を殘して悠々壇を下らせらる。

岡田秀造君　「光榮ある我が三年級」といふ演題の下に、開口一番「我が級が本校に於て榮を負ふこと已に宮田先生が御說の通りである、併しながらです、私が平日の考へとして尙不足に存ずるのは体育の一点であります、抑も体育たるやだ、敎育上三大綱目の一でありまして智育德育は之に隨伴するものである、何となれば健康は智識の母である、德義の基である、都ての幸福の始めである……」との論旨、快辯滔々、大に靜聽すべきものであつた。

高野宗重君　「本日此の盛大なる級會に於て大に諸君の雄辯を試みるがよい、大に滅法界の法螺を吹き立てるがよい、秘藏の隱し藝大に演るべしだ、が、併し一言大に注意して置きたいことがある。言論の自由あるは元よりの事なるが、余輩は苟も學生の身であるから學生といふ人格及び其本分を失れては宜しくない……終りに臨んで一言致し置きますが、后程演ぜらるゝドラマ、喜劇など幾分顏の貌を變へたり、猩燕脂を使はないにも限らぬが、學生といふことに就ては徹頭徹尾正確に維持する決心でありますから、決して誤解のない樣に願います」と。此男我級雄辯者の一人、そりかへり、大きな胸を張りて演ぜしもの、うれかくの如くである。

石川先生　悠々敢て迫らざる態度を以て壇に上られ、宮田先生が論鋒をつぎ玉ひて、「此級がかく迄智育の進步せるを知らなかつた、又德育に就て驚き、又又体育に就て驚いた（拍手喝采）……驚いた〳〵の一天張に言を起され、其名譽の維持は即ち余輩の雙肩にかゝる所、然かも高慢なる擧動は屬々失敗を來たすの基因であると述べられ、近頃（？）當地に流行せる自轉車の乘り方を例証して吾人に臨まる者一二にして足らない。奇談交々至りて快辯流暢、所謂立板に水の如く、而も熱心と誠意とは自ら言外に顯はれ、聽者をして猛省せしめられたるは流石に先生の先生たる所似である。

高木琢磨君　『輿論に就いて』といふ演題。題丈けを見てさへ吾等のやうな小さな膽は縮みろーであつた。君が

咳一咳滿堂を睥睨した時、吾れ等の胸は調子高く皷動した、コップに水を注ぎながら說き出で給ひし論旨を約說すれば下の如しだ。先づ一般輿論の意義を解釋して輿論が文化の發達に及ぼす關係を說き、次に輿論は決して排除すべきものにあらずと斷じ、延いて不和雷同―野次―に及ぼす所、滔々としてやりつけられたるは感服の至であつた。

王建善君　「私は無窮故事といふ古代の奇話を致します」との前口上。題を揭ぐる既に奇。此の奇題を以て其の奇辯を弄せらる、其說の奇もとより論を待たずである。滑稽突梯の辯、久しく語りてよく人を倦まざらしむる異才は確かに君が獨得の長所である。併し君の辯舌、耳聽くべくして筆寫すべきでない、吾人は只君が辯舌を概記して滿足するを得ないのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

かくて休みなき時の進みに、もうよかろーと誰か隅の方で欠伸交りの御催足。それが委員の耳に達したと見ゐて、うす皮包の牛肉飯は分配せられた。喫茶の音、咀嚼のひゞき、滿場敢て一語も發しない。(此時福引の籤分配)

暫らくして委員は「諸君！」と一唸り、こゝに我等の舞臺を變じて余興に移りますとの御報告。一坐爲めに動きて恰も湯の沸き返るやう、日頃寂莫たる濟々堂も今は無我無心の一小樂天地と化し去つたのだ。

＊　＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊　＊

余興

殘紅かすかに西の空を淡紅色に染めて、薄闇の帳は殆んど下界を征服してしまうた頃、擊拆の響が喧しう凡の音と相應じて鳴り渡つた。

題して『地獄旅行』といふ、果して何を演ずるであろうか。罷り出でたる斯道の先生野村君、一寸一座を見廻して語りいで給ふは先生得意の講談だ、滑稽巧妙、手眞似の技術は先生の十八番なのだ。

狂言『朝日奈』　斯道に堪能なる中村、田中の両君が必死の勢でやられたのである。一語一調、一擧一動、腹を撚らさないものはないが、中にも閻魔の語「當時は人間が怜悧になり八宗九宗に宗体を別ち、極樂へろろり〳〵とろろめくに依つて、地獄の飢饉以ての外で御座る……」謠ひ來り謠ひ去るところ、人をして捧腹絕倒せしめた。誠に〳〵感服の至りで御座る。

淺田君の講談　南の隅からぬつくと出でゝ無造作に壇に登り、鼻紙手拭扇の用意もろこ〳〵に、口元可笑しく談じ出でたる前口上「エー私は本日の級會に幹事さんの御招待をうけ、再三再四再五再六まで御斷りを致した譯

でがすが……」と澄し込んだる風采は天晴本職の講談師も跣足といふ權幕、始めから終りまで滿座を絶倒せしめたのは慥かに君の御手腕である。

尺八合奏　同好の間に喧然たる「追分」の曲、朗かに響き渡れり、或は低く或は高く、流るゝ如く渦卷くが如く、昇りては萬丈の峯に達し降りては千仞の谿谷に陷る一起一伏、悲壯哀烈心溶け胸躍らん計りである、實に〳〵斯道の御大將、さすがは恐縮の至り。

『青春』が濟み、やゝ暫らくして白幕は眼前に張られた、これ『ウイリヤム、テル』の準備である。洋々として響く樂の音は、時に潺々として苦の下ゆく清水の如く、時に寄せては返へす磯の浪巖に觸れて挫くるが如しである。樂終りて白幕開く。（ドラマの筋書でも隨分長いから、貴重な余白を汚すの恐があり、此には涙を呑んで畧します）唯、グッセルが胸より両腕へかけての燦然たる假裝は皮色と焦茶の段だらにてこれが悉く代赭の土と濃き綠の草木の背景中に投じ去つて、畫割がものを云つてる樣に見ゑたるも、一段の興味を加へたのである。惣じて中々の上出來であつたが、殊に驚くべき成効はグッセルに、テル、及びワルテルである。自体此役此子役には難かしい長句警語が多く、臺詞（せりふ）數もいと多きを斯く迄にやつて退けたるところ、觀者をして歡呼の聲を絶たしめなかつた。（會話は少し早きに過ぎたとの公評だ）

玉森、高木両君の手品　何れも劣らぬ目を眩ますといふ魔術。先づ玉森君が獨逸式の手品として手巾の両端固く結ばれたる括の二三を瞬時に解き放ち、次に一圓紙幣を火中ゑ投じてこれを灰中より引き出だされたる魔法の妙不思義。高木君のは一個の鷄卵より暫時にして八匹以上の雛鷄（ひな）を孵化するといふ奇術—實はその卵を破つて入れたる鉢をハンカチーフで掩ひ、之れを觀者の一人に牽かせては一ひき二ひき……八ひき（鉢牽き）といふ洒落なので、一同一時ゑ吹き出した、拍手喝采。

吾等は四時間に余る持續的歡呼の爲めに聲は涸れて洪笑の爲めに顎は疲れ果てた。もー笑ふべき余地がないぞと憂へて居る所へ、配ち與へられたる一人前三錢の菓子ゑ勇氣づけられた、丁度蘇生したかのやう。

茶を啜る音が稍靜まつた頃、見事にやられたのが林秀雄君の劒舞。蒼龍を腰にして場にある樣、風姿凛々、誠に人をして襟を正しうせしめた（但し洋服がたのれ人はいざ知らず）忽ち妙音の吟ずらく「落花紛紛雪紛紛」、丈夫は感極つて立つて舞ふ、光鋩電閃毫として劒に聲ありだ。沈痛の吟、剛壯の舞、彼一句是一舞、人をして覺ゑず腕を扼せしめたのである、さすがは御名流、感服の至

りに存ずる。

鈴木茂君　琵琶歌『國船』を奏せらる、……雲に聳ゆる高山も登らばなどか踰ゆざらん――朗々吟し出す巧妙さ、大絃嘈々小絃切々と樂天が形容した琵琶の聲は何れの節に潜むであろうか、低き所は冴ゆ渡り、高き所は澄み渡り、吹雪の音を更夜窓外に聽く如く、玉散る秋水に血塗みれたるものを眼にせるの感もあり、一起すれば勇壯潑々、一伏すれば沈痛悲々、一縷一絶、妙樂の船に乘りて駈けめぐり、天國に遊ぶの思あらしめたるは強ち吾れ一人のみでなからう……颶高波しのぎ得て思ふ港にいかでつくべき……と細く長く結ばれた、サア何と評しやう？

狂言『雷』　京師の藪醫者が東下りの謠曲に始まり、道すがらの曲「都よは典藥頭の何のと申して上手の醫者が數多御座るに由つて、われ等如きの藪醫者には誰も脉を見せるものも御座らぬ程に、今は渡世がなり兼ねて……云々、承れば東にい醫師が少ないと申すによつてこれより東に下り、一稼ぎ稼がうと存ずる、先づろろり〳〵と參ろう」の語れもしろく――、醫師渺茫たる廣野にいでゝ雷鳴にあひ、桑原〳〵といふて屈む。雷と醫師の間に二三の問答ありて　雷「今日は心面白く鳴り渡りたればッイ雲間を踏み外して此野に落ち、したゝか腰の骨をうつた、汝誠の醫者なれば身共の腰を治して呉れい」のあたり、醫師の語、雷の言、一調一節いよ〳〵面白し。醫師は雷の腰に鍼をうつて治療し、其甲斐ありて雷は全快し、御禮として醫師を典藥頭にするの段に終る。憾らくば余輩元來斯道に疎うして其技の如何を覗い得ない、が、併し僕の口を滑り出でゝ再三再四繰り返へされたる語がある、曰く、絶妙々々と。

喜劇『寫眞婿』　どうも脚本といふものは糸を手操くるやうに筋ばかり書き立てても無味乾燥で面白ろくはないが、さればとて叢から蛇が頭を出すやうにニョコリ〳〵と語の頭が突き出て、主意が何處にあるか分らぬのにも困る、といふ点から成るべく奇拔に詩的に、高尚に多趣に、滑稽にして猥褻を避けたるものを撰んだのが即ち標題である。

第一幕は久右衛門宅の場である。主人久右衛門が五つ紋の羽織に博多の角帶しめて商人の裝ひ正しく、顎髯ゆり動かして語り出だせば初子とやら十八九の娘、否と應へて父の勸告に從はず、主人念怒の体にて奥の間に去る。初子は下婢との對話中急病を發して苦悶し、下婢の慌惶に驚きて植木屋の熊公突入、介抱して抱き起す所へ……位で止さう。（貴重なる本誌を汚さんよりは、言はぬが花なりの一句で擱筆しやう）

第二幕、第三幕。舞臺の余輩が評すれば樂屋から褒むるの嫌はないでもないが、兎も角舞臺の不完全なるに拘はらず、巧妙に演じたる技術は好評嘖々たるものであつた。動もすれば、本職を凌ぐ程であつたとサ。

＊　＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊　＊

其他爽快なる吟詩や、瀟洒たる舞踏など、興はいよ〳〵湧き出でゝ愈々盛んに盡くる所がない、正に愉快は其極点に達したのである。然し悲しい哉だ、無情の時計は刻一刻過ぎ去りて已に十二時近くである。止むを得ず、此に到つて福引の景品は分配せられ、呟く者、囁く者、笑ふ者、怒る者、欣ぶ者、幾十種の顏貌異常、好モデルを得たのも一興であつた。聲高に喚び揭げられ、視線は齊しく一点に集中する間一髮、さすがに余興委員が數日の苦心だけあつて、其籤札の文句は景品に相對應し、腹を縒らさないものとては殆んど無かつたのである。

かくて委員は閉會の辭を述べ一同起立、第三年級萬歲を三唱して散會したのが丁度十二時。

＊　＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊　＊

嗚呼、愉快であつた、積日の鬱氣も何處へやら散り去つて大愉快を極めたのである。つれつれなる秋の夜長も半夜は更けて結びかねつる宵の夢、せめて殘れる半夜さへ、新しき友との團欒をつくらしめよ。（雨城生）

○アドリナリン製劑　近來東京三共商店に於て發賣せるアドリンナリン製劑は周く世に行はれ、其効顯著にして大家の好評を博しつゝありと、今試に其製劑と時價とを擧ぐれば左の如し。

▲アドリナリン吸入劑　時價　一匁入　金貳圓

一種の油類に溶解したるものにして鼻腔の噴霧外聽道の應用に適し殊にカテーテル、ブーシーに塗布し挿入する時は粘滑止血の一擧兩得あり

▲アドリナリン軟膏　時價　半匁入　金壹圓

膏油の製劑にして鼻腔内の疾患痔疾等に適當なり

▲アドリナリン坐藥　時價　十二個入　金壹圓　六個入　金六拾錢

一般坐藥と同一の形態に製せられ膣内及び直腸の疾患痔疾等に適す

▲アドリナリン錠　時價　廿五錠入　金貳圓廿五錢

一錠中〇、〇〇一を含むが故に一瓦液に一錠を溶解すれば新鮮なる千倍の溶液を得べし。

○三十七年度十全會收支決算報告

三十七年度金澤醫學專門學校十全會收支決算別紙之通リ決算遂ケ候結果收入增金九拾壹圓拾壹錢五厘支出殘金八拾四圓合計百七拾五圓拾壹錢五厘ニシテ內金百貳拾五圓ハ三十八年度ヘ繰越ヲ要シ殘貳拾五圓拾壹錢五厘ハ會則第十三條第四項ニ依リ資金ニ組入ヲ要ス

現在資金ハ國庫債券額面八百五拾圓及ヒ現金貳拾五圓拾壹錢五厘ナリ

右報告候也

明治三十七年度金澤醫學專門學校十全會收入決算表

科目	豫定額	收入濟額	豫定額ニ比シ收入額ノ差 增	豫定額ニ比シ收入額ノ差 減	備考
	円	円	円	円	
第一欵 金澤醫學專門學校十全會	九、八八四九	一、〇〇九、九六四	九一、一一五	〇	
第一項 特別會員寄附金	一一、九九七六	一一、九四五八	〇	〇、五一八	
第一目 職員寄附金	一一、九九七六	一一、九四五八	〇	〇、五一八	職員俸給額少ナカリシニ依ル
第二項 通常會員會費	七〇二、〇〇〇	七六四、五〇〇	六二、五〇〇	〇	
第一目 醫學生會費	六二四、〇〇〇	六八四、〇〇〇	六〇、〇〇〇	〇	退學者少ナキニ由ル
第二目 藥學生會費	七八、〇〇〇	八〇、五〇〇	二、五〇〇	〇	仝
第三項 利金	一七、五〇〇	四四、八八三	二七、三八三	〇	繰越金ノ多カリト經費節減國庫債券應募セシ利子ヲ加ヘタルニ依ル
第一目 預金利子	一七、五〇〇	四四、八八三	二七、三八三	〇	
第四項 繰越金	七七、八七三	七七、八七三	〇	〇	
第一目 繰越金	七七、八七三	七七、八七三	〇	〇	
第五項 雜收入	一、五〇〇	三、二五〇	一、七五〇	〇	
第一目 物品拂下代	一、五〇〇	一、二一〇	〇	〇、二九〇	不用物品少ナカリシニ依ル

明治三十七年度金澤醫學專門學校十全會支出決算表

科目	原豫算額	流用增減額 △印ハ減	豫定現額	支出濟額	不用額	備考
第二目 雜入	〇	二、〇四〇	二、〇四〇		〇	提灯行列費殘余金寄附ニ付本目設置ス
合計	九一八、八四九	一、〇〇九、九六四	九一、一一五			
經常部	円	円	円	円	円	
第一欵 金澤醫學專門學校十全會	九一八、八四九		九一八、八四九	八三四、八四九	八四、〇〇〇	
第一項 講話部	一七、五〇〇	〇	一七、五〇〇	一七、〇三四	〇、四六六	
第一目 大會費	一三、五〇〇	二、〇一四	一五、五一四	一五、五一四	〇	
第二目 常會及語學部費	二、〇〇〇	△〇、四八〇	一、五二〇	一、五二〇	〇	
第三目 臨時會費	〇、五〇〇	△〇、五〇〇	〇	〇	〇	
第四目 講話材料費	一、〇〇〇	△一、〇〇〇	〇	〇	〇	
第五目 語學部大會費	〇、五〇〇	△〇、〇三四	〇、四六六	〇	〇、四六六	
第二項 雜誌部	三三七、四七六	〇	三三七、四七六	三三五、八一五	一、六六一	
第一目 雜誌費	二九七、九五六	三、七三四	三〇一、六九〇	三〇一、六九〇	〇	
第二目 通信費	一六、六四〇	△二、七七九	一三、八六一	一二、二〇〇	一、六六一	
第三目 消耗品費	七、〇〇〇	△二、七七〇	四、二三〇	四、二三〇	〇	
第四目 新聞費	一一、八八〇	△一、〇八〇	一〇、八〇〇	一〇、八〇〇	〇	
第五目 製本費	三、〇〇〇	三、一二〇	六、一二〇	六、一二〇	〇	
第六目 雜費	一、〇〇〇	△〇、二二五	〇、七七五	〇、七七五	〇	
第三項 遊技部	一五二、五九三	〇	一五二、五九三	一五一、六六五	〇、九二八	

第一目 秋季運動會費	一一八、一六五	○	一一八、一六五	一一八、一六五	○
第二目 ロンテニス費	三三、五〇〇	○	三三、五〇〇	三三、五〇〇	○
第三目 フートボール費	〇、四二八	○	〇、四二八	〇、四二八	〇、四二八
第四目 端艇基金	〇、五〇〇	○	〇、五〇〇	〇、五〇〇	○
第四項 劍道部	二二、〇〇〇	○	二二、〇〇〇	二二、〇〇〇	〇、五〇〇
第一目 寒稽古奬勵費	一二、〇〇〇	△四、三〇五	七、六九五	七、三五〇	〇、三四五
第二目 春秋大會費	一〇、〇〇〇	四、三〇五	一四、三〇五	一四、三〇五	○
第五項 柔道部	二二、〇〇〇	○	二二、〇〇〇	二一、七一〇	〇、二九〇
第一目 寒稽古奬勵費	一二、〇〇〇	△三、二一〇	八、七九〇	八、五〇〇	〇、二九〇
第二目 春秋大會費	一〇、〇〇〇	三、二一〇	一三、二一〇	一三、二一〇	○
第六項 弓術部	二四、〇〇〇	○	二四、〇〇〇	二四、〇〇〇	○
第一目 大會費	一六、〇〇〇	〇、一八一	一六、一八一	一六、一八一	○
第二目 備品費	八、〇〇〇	△〇、一八一	七、八一九	七、八一九	○
第七項 會務費	四〇、〇〇〇	〇、〇九〇	四〇、〇九〇	四〇、〇九〇	○
第一目 備品費	一、八〇〇	△〇、三五〇	一、四五〇	一、四五〇	○
第二目 印刷費	〇、五〇〇	△〇、五〇〇	○	○	○
第三目 消耗品費	三、七〇〇	〇、六九〇	四、三九〇	四、三九〇	○
第四目 雜費	四、〇〇〇	〇、二五〇	四、二五〇	四、二五〇	○
第五目 茶話會費	三〇、〇〇〇	○	三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	○
第八項 學術實習部	六〇、〇〇〇	一九、八三〇	七九、八三〇	七九、八三〇	○
第一目 藥品材料費	四五、一〇〇	〇、七九五	四五、八九五	四五、八九五	○
第二目 備品費	九、九〇〇	一八、八〇〇	二八、七〇〇	二八、七〇〇	○

第三目 雜費	五、〇〇〇	〇、二三五	五、二三五	五、二三五	〇	
第九項 豫備費	九〇、一三〇	△一九、九二〇	七〇、二一〇	四、七五〇	六五、四六〇	
第一目 豫備費	九〇、一三〇	△一九、九二〇	七〇、二一〇	四、七五〇	六五、四六〇	
第十項 國債應募費	一五三、一五〇	〇	一五三、一五〇	一三八、三〇〇	一四、八五〇	
第一目 國債應募費	一五三、一五〇	〇	一五三、一五〇	一三八、三〇〇	一四、八五〇	
經常部合計	九一八、八四九	〇	九一八、八四九	八三四、八四九	八四、〇〇〇	

三十七年度十全會校外特別會員會費收支決算報告

三十七年度金澤醫學專門學校校外特別會員會費收支決算ノ結果

本年度收入金額　六七三、二七九

ナリ內

自三十八年度至四十一年度會費前納金額　四二九、六〇〇

扣除殘金　二四三、六七九

ハ本年度實際收入金額ナリ

本年度支出濟額ハ　一五六、二七八

ニシテ收入額ニ比シ　八七、四〇一

ノ殘額ヲ生シタリ此金額ハ會則第十三條第四項ニ依リ資金ニ組入ス

現在資金ハ三十八年以后ノ前納會費ヲ供入レ是ニ資金ヲ加ヘ第三回國庫債券額面貳百五拾圓ヲ價格貳百參拾圓五拾

錢ニ應募ス依而現金貳百八拾六圓五拾錢壹厘及ビ國庫債券額面貳百五拾圓ナリ
右報告候也

明治三十七年度金澤醫學專門學校校外特別會員會費收入決算表

科目	豫算額	收入濟額	豫定額ニ比シ收入濟額 増	豫定額ニ比シ收入濟額 減	備考
	円	円	円	円	
第一欵 金澤醫學專門學校十全會	五〇八、九七三	六七三、二七九	一六四、三〇六	〇	
第一項 校外特別會員會費	四〇三、八〇〇	五六一、八〇〇	一五八、〇〇〇	六五、六〇〇	未納者アリシニ依ル
第一目 三十七年度會費	二二一、八〇〇	一五六、二〇〇	〇	〇	九十七圓八十錢ハ本年度以前納ノモノナリ
第二目 前年度未納會費	九二、〇〇〇	四二、〇〇〇	〇	五〇、〇〇〇	未納者アリシニ依ル
第三目 前納會費	九〇、〇〇〇	三六三、六〇〇	二七三、六〇〇	〇	規則改正ノ結果前納セシモノ多カリシニ依ル
第二項 利金	三、九六〇	一〇、二六六	六、三〇六	〇	
第一目 預金利子	三、九六〇	一〇、二六六	六、三〇六	〇	收入金多カリシニ依ル
第三項 繰越金	一〇一、二一三	一〇一、二一三	〇	〇	
第一目 繰越金	一〇一、二一三	一〇一、二一三	〇	〇	
合計	五〇八、九七三	六七三、二七九	一六四、三〇六	〇	參拾五圓貳拾壹錢參厘ハ前年度剩余金ニシテ六十六圓ハ前納會費ナリ

明治三十七年度金澤醫學專門學校校外十全會支出決算表

科目	原豫算額	流用増減額 △印ハ減	豫定現額	支出濟額	不用額	備考
	円	円	円	円	円	
第一欵 金澤醫學專門學校校外十全會	二三二、三〇〇	〇	二三二、三〇〇	一五六、二七八	七六、〇二二	
第一項 校外特別會員費	二〇九、〇七〇	二、〇〇〇	二一一、〇七〇	一五六、二七八	五四、七九二	
第一目 雜誌費	一六七、五六〇	〇	一六七、五六〇	一二六、四七〇	四一、〇九〇	

第二目 通信費	三四、七〇〇	〇	三四、七〇〇
第三目 雜費	六、八一〇	二、〇〇〇	八、八一〇
第二項 豫備費	二三、二三〇	△二、〇〇〇	二一、二三〇
第一目 豫備費	二三、二三〇	△二、〇〇〇	二一、二三〇
合計	二三二、三〇〇	〇	二三二、三〇〇

三十七年度中收入校外特別會員會費收入內譯表

會費年別	年額壹圓 人員	年額壹圓 金額	年額六拾錢 人員	年額六拾錢 金額	合計 人員	合計 金額
參拾五年度會費	一五	一五、〇〇〇円	〇	〇円	一五	一五、〇〇〇円
參拾六年度會費	二七	二七、〇〇〇	〇	〇	二七	二七、〇〇〇
參拾七年度會費	五六	五六、〇〇〇	四	二、四〇〇	六〇	五八、四〇〇
參拾八年度會費	一三七	一三七、〇〇〇	四	二、四〇〇	一四一	一三九、四〇〇
參拾九年度會費	一二八	一二八、〇〇〇	四	二、四〇〇	一三二	一三〇、四〇〇
四拾年度會費	八九	八九、〇〇〇	四	二、四〇〇	九三	九一、四〇〇
四拾壹年度會費	〇	〇	四	二、四〇〇	四	二、四〇〇
總計	四五二	四五二、〇〇〇	二〇	一二、〇〇〇	四七二	四六四、〇〇〇

三十七年度金澤醫學專門學校十全會資金支出決算報告

三十七年度金澤醫學專門學校十全會資金支出決算ノ支出濟額ハ

四〇四、三〇〇

ナリ內

二、六六、〇〇〇

ハ三十六年度ニ於テ國庫債券額面七百圓應募シタル拂込未濟額ニシテ

一三八、三〇〇

ハ三十七年度ニ於テ國庫債券額面百五拾圓應募シタル拂込額ナリ

四〇九、一五〇

豫算額ニ比シ支出濟額ヲ差引タル金

四、八五〇

ハ不用ニ屬シタル金額ナリ

右報告候也

明治三十七年度金澤醫學專門學校十全會會費資金支出決算表

科目	豫算額	支出濟額	不用額
	円	円	円
第一款 金澤醫學專門學校十全會資金	四〇九、一五〇	四〇四、三〇〇	四、八五〇
第一項 資金	四〇九、一五〇	四〇四、三〇〇	四、八五〇
第一目 公債証書購入代	四〇九、一五〇	四〇四、三〇〇	四、八五〇
合計	四〇九、一五〇	四〇四、三〇〇	四、八五〇

三十七年度金澤醫學專門學校十全會校外特別會員資金決算報告

三十七年度校外特別會員資金決算ノ處

前年度剩餘金

三五、二一三

ニ本年度剩餘金

合計　五二、一八八

ナリ是皆資金ヘ組入額ナリ　八七、四〇一

右報告候也

三十七年度金澤醫學專門學校十全會校外特別會員資金決算表

科目	豫算額	資金組入額	豫算額資金組入額差
	円	円	円
第一款　金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費	二四、七一三	八七、四〇一	六二、六八八
第一項　資金	二四、七一三	八七、四〇一	六二、六八八
第一目　資金	二四、七一三	八七、四〇一	六二、六八八
合計	二四、七一三	八七、四〇一	六二、六八八

會告

○寄贈及交換書目（十一月十八日迄領收之分）

國家醫學會雜誌　三二八、九、二〇、一二、　仝　會

校友會雜誌　三八、　仝　京都府立醫學專門學校會

日本醫事雜誌索引　三十七年分　一冊　日本醫事年報社

中外醫事新報　六〇六、七八、九、一〇、一一、一二、三、四、五、　仝　社

日本助產婦新報　八八、九、九〇、一一、一二、三、　仝　發行所

東京醫事新誌　一四、一四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、三、四、五、　仝　局

醫學中央雜誌　二八、九、三〇、一一、一二、　仝　岡山醫學專門學校會

校友會雜誌　六、　仝　社

日本醫事週報　五三七、八、四〇、一一、一二、三、四、五、六、七、八、九、五〇、一一、一二、三、四、五、六、七、八、　仝　會

公衆醫事　八ノ六、七、八、　仝　會

藝備醫事　一〇九、一〇、一一、一二、三、　藝備醫學會

醫海時報　五七四、五六、七、八、九、八〇、一、二、三、四、五、六、七、
產科婦人科學雜誌　七ノ六、七、八、九、一〇、
中央婦人科學雜誌　三ノ一
東京醫學會雜誌　一九ノ二、三、四、五、六、七、九、二〇、
藥石新報　五三八、九、四〇、一、二、三、四、五、六、七、八、九、五〇、一、二、
臨床藥石新報　一、二、三、四、五、
學友會雜誌　三、
助產之栞　一〇九、一〇、一、二、三、
東北醫學會々報　三七、
台灣醫學會雜誌　三三、四、五、六、七、
好生館醫事研究會雜誌　二二ノ二、三、四
藥學雜誌　二六〇、一、二、三、四、
北越醫學會々報　一四七、八、九、
北辰會雜誌　四一、
廣島衛生醫事月報　七八、九、八〇、一、二、
醫事新聞　六八八、九、九〇、一、二、三、四、五、六、七、
岡山醫學會雜誌　一八五、六、七、八、九、
產科婦雜誌　六七、八、九、七〇、一、
神經學雜誌　四ノ四、五、六、七、
成醫會月報　二八〇、一、二、三、四、
治療新報　四〇、一、二、三、四
衛生談話　六ノ六、七、五ノ八、九、

全　社
全　會
緒方婦人科學會　會
全　社
全　社
新潟縣立村上中學校　全　會
緒方助產婦學會
仙臺醫學專門學校　全　會
全　會
全　會
日本藥學會　會
全　會
第四高等學校　全　會
全　社
全　社
全　會
日本產婦協會
日本神經學會　會
全　會
全　社
通俗衛生茶話會

日本眼科學會雜誌　九ノ六、七、八、九、一〇、
順天堂醫事研究會雜誌　三九〇、一、二、三、四、
校友會雜誌　三、
大日本耳鼻咽喉科會々報　一一ノ二、三、
校友會雜誌　六、
莊內醫學會々報　三三、四、五、六、
校友會雜誌　三八、
軍醫學雜誌　一四四、五、六、七、
大日本私立衛生會雜誌　二六六、七、八、九、
日本消化機病學會雜誌　三ノ六、四ノ一、
鎮西醫報　九二、三、
北海醫報　五ノ三、四、
京都醫學會雜誌　二ノ三、四、
若越醫談　一、
皮膚科及泌尿器科雜誌
校友會雜誌　二五、
校友會々報　八、
研瑤會雜誌　六六、
治療藥根　三、四、
衛生新報　一八、九、
大阪圖書館年報(第二)自明治三六年四月至仝三八年三月　一冊
靜岡縣醫學會々報　一三、

全　會
全　會
千葉醫學專門學校　全　會
全　會
山口縣立德山中學校　全　會
全　會
東京開成中學校　全　會
陸軍軍醫學會
全　會
全　會
全　社
北辰病院研究會
全　會
若越醫學會
日本皮膚科學會
三重縣立第一中學校　全　會
石川縣立第一中學校　全　會
長崎醫學專門學校　全　會
治療藥報社
全　社
大阪圖書館
全　會

東京市教育會雜誌　一四、五、　全會
中央醫學會雜誌　六四、五、　全會
獨逸羅和譯醫語新字典　一冊　吐鳳堂書店
井上內科新書　卷一一冊　全書
解剖學講本　卷一一冊　醫學科第十八回卒業生紀念書籍トシテ小原芳雄君外一同
日本醫學博士申請論文集　第一卷上、下二冊　全
鼻科學新論　上卷一冊　全　上

○十全會々費領收

（明治三十八年十一月十日迄）

金參圓（自三十五年度至三十七年度三ヶ年分）　田中正一君
金貳圓（自三十七年度至三十八年度二ヶ年分）　木下克雄君
金參圓（自三十八年度至三十九年度三ヶ年分）　關屋林之助君
金參圓（自三十九年度至四十年度五ヶ年分）　久保襄一郎君
金參圓（自三十八年度至四十年度三ヶ年分）　岡村俊照君
金參圓（全上）　笹田順二君
金參圓（全上）　伏田金三君
金參圓（全上）　須藤庄太郎君
金參圓（全上）　熊西中藏君
金參圓（全上）　鷲山謙吉君
金參圓（全上）　長澤安弘君
金參圓（全上）　吉池省吾君
金參圓（自三十八年度至四十年度三ヶ年分）　有壁一雄君
金參圓（全上）　中川喜平君
金參圓（全上）　草野佐一郎君
金參圓（全上）　佐々木純一郎君
金參圓（全上）　長谷眞美君
金參圓（全上）　高橋重二君
金參圓（全上）　平原雲新君
金參圓（全上）　中須熊藏君
金參圓（全上）　高橋八郎君
金參圓（全上）　岡田甚英君
金參圓（全上）　岩崎勝治君
金參圓（全上）　四倉重篤君
金參圓（全上）　森舜司君
金參圓（全上）　龜井權六君
金參圓（全上）　島村伊之助君
金參圓（全上）　鴨脚光榮君
金參圓（全上）　中村德藏君
金參圓（全上）　山下鋲吾君
金參圓（全上）　杉本恒治君
金參圓（全上）　谷中黎次郎君
金參圓（全上）　坂本信一君
金參圓（全上）　江村正也君

金參圓（全上）河野益躬君
金參圓（全上）山內兎毛君
金參圓（全上）伊藤喬君
金參圓（全上）齊藤傳平君
金參圓（全上）淺利義治君
金參圓（全上）松尾等君
金參圓（全上）田邊傳六君
金參圓（全上）窪美一久君
金參圓（全上）庄司正義君
金參圓（全上）建部鈴次郎君
金參圓（全上）佐崎伊久君
金參圓（全上）田村圓四郎君
金參圓（全上）甘利昇君
金參圓（全上）近森村主君
金參圓（全上）杉田治十郎君
金參圓（全上）高橋幸七郎君
金參圓（全上）渡邊疆君
金參圓（全上）上田茂君
金參圓（全上）手塚榮太郎君
金參圓（全上）成澤輝一君
金參圓（全上）吉田東秀君
金參圓（全上）來間隆次君

金參圓（全上）中西島吉君
金參圓（全上）山田伊之助君
金參圓（全上）津田作平君
金參圓（全上）池田菱吉君
金參圓（全上）英軒二君
金參圓（全上）金平鐵太郎君
金參圓（全上）久保田保治君
金參圓（全上）黑田眞岳君
金參圓（全上）鈴木實君
金參圓（全上）井上啓二君
金參圓（全上）金谷季男君
金參圓（全上）成田成治君
金參圓（全上）千田常外君
金參圓（全上）谷澤一郎君
金參圓（全上）江守武君
金參圓（全上）折口靜君
金參圓（全上）小泉永宣君
金參圓（全上）安積鼎君
金參圓（全上）溝口龍三君
金參圓（全上）曾根章君
金參圓（全上）村尾純昌君
金參圓（全上）毛利德基君

金參圓（自三十八年度至四十年度三ヶ年分）
金參圓（仝　上）　近藤勇記君
金參圓（仝　上）　中野源一君
金參圓（仝　上）　城起吾老君
金參圓（仝　上）　安田三木君
金參圓（仝　上）　福岡捨雄君
金參圓（仝　上）　長井運男君
金參圓（仝　上）　稻崎龍助君
金參圓（仝　上）　松井源長君
金參圓（仝　上）　金堂圓君
金參圓（仝　上）　八木德太郎君
金參圓（仝　上）　羽田公太郎君
金參圓（仝　上）　森清吉君
金參圓（仝　上）　福島可鋪君
金參圓（仝　上）　水上俊三君
金壹圓（三十八年度一ヶ年分）　田代保二君
金參圓（自三十七年度至三十九年度三ヶ年分）　佐々木辰實君
金參圓（仝　上）　若尾隆吉君
金參圓（自三十八年度至四十年度三ヶ年分）　藤村敬一君
金參圓（自三十五年度至三十七年度三ヶ年分）　上坂政太郎君
金參圓（自三十八年度至四十年度三ヶ年分）　尾崎平吉君
金參圓（仝　上）　小掠正香君
金參圓（仝　上）　岡田虎介君
金參圓（自三十八年度至四十年度三ヶ年分）　彦坂誠一君
金參圓（仝　上）　三崎吉太郎君
金參圓（仝　上）　佐野爲明君
金參圓（仝　上）　西澤寛治君
金貳圓（自三十五年度至三十六年度二ヶ年分）　高澤清松君
金貳圓（自三十七年度至三十八年度二ヶ年分）　大橋豊君
金參圓（自三十八年度至四十年度三ヶ年分）　奈良八郎君
金參圓（仝　上）　芦澤孝治君

告

次號原稿ノ切　十二月二十日

十全會雜誌部

君子固窮。　小人窮斯濫矣。　論語

新刊

◉斬新內科書第壹卷發行

千葉醫學專門學校教授 醫學博士 井上善次郎先生著

井上內科新書

圖畫挿入 全四卷 堅牢本綴

第壹卷（消化器病編）正價金貳圓拾錢 郵稅金拾五錢

第貳卷（呼吸器、循環器、泌尿器）**印刷中**

著者ノ緒言ニ曰ク『本書ハ殊ニ診斷及療法ニ重キヲ置キテ實地ノ應用ニ適切ナラシメンコヲ勉メキ而シテ書中外科ト關係深キ痔瘻痔核ノ章ハ同僚三輪博士ノ執筆ヲ煩ハシタリ』ト以テ著者ノ用意ノ如何ニ周到ナルカヲ知ルニ足ルベシ。元來我邦ニ於テ行ハルベキ內科書ハ我邦固有ノ點アルヲ要シ決シテ飜譯的ナルヲ容サズ而シテ斯ノ如キ要求ハ多年學生薫陶ノ任ニ當リ實地診療ノ職ヲ經タル著者ノ如キ學者ニ向テ始メテ之ヲ望ムコヲ得ベシ、今ヤ著者ガ最得意トセル消化器病編先ヅ梓ニ上レルヲ以テ敢テ江湖ニ告白ス

◉發行元

東京本郷區龍岡町卅四番地（電話下谷千六百七十二番）

吐鳳堂書店

新刊

醫學士 興津磐先生
醫學士 大島櫟先生 共著

（四六判紙數七百五拾四頁）
（語數拾萬餘言）

獨羅和譯

醫語新字典

全一冊

正價金參圓
小包郵稅拾錢
本綴美裝
印刷鮮明
圖畫挿入

本書ハ著者ガ拮据盡瘁數年ヲ經テ漸ク完成シタルモノニシテ（一）語數ノ豐富ナルコト（二）名詞ノミナラズ形容詞動詞ニ至ル迄テ盡ク之レヲ網羅シタルコト（三）文法上ノ符號ヲ用ヒテ名詞ニハ姓動詞ニハ自他ヲ區別シタルコト（四）譯語ノ適切ナルコト特ニ數十種ノ譯書ヲ檢シテ一々其出典ヲ明記シタルコト（五）多數ノ圖畫ヲ挿入シ且ツ比較物體ノ大小ヲモ表示シタルコト等其特色トスル所頗ル多ク實ニ醫學字典中ノ巨臂ト謂フベシ加之ナラズ印刷ノ鮮明ナル紙質ノ善良ナル錦上更ニ花ヲ添ヘタルノ趣アルベシ

●發行所　東京本郷區龍岡町卅四番地（電話下谷一六七二番）　吐鳳堂書店

ドクトル　富士川游校訂　帝國圖書館司書　太田爲三郎編

日本醫事雜誌索引

新刊　明治卅七年度分　正價金八拾錢　郵税金四錢

既刊

- 明治三十三年度分　正價金六拾錢　郵税金四錢
- 明治三十四年度分　正價金七拾錢　郵税金四錢
- 明治三十五年度分　正價金七拾錢　郵税金四錢
- 明治三十六年度分　正價金八拾五錢　郵税金六錢
- 明治三十七年度分　新刊

次刊

- 明治三十二年度分（本年秋發行し漸次既往に溯りて毎年一冊若くは貳冊を追補し遂に其大成を期す）

本書は各冊一年間日本醫事雜誌に掲載せられたる原著は勿論重なる飜譯ものは悉く載せて漏らすと無し若し某の件に就て「リテラツール」を搜索せんと欲する時は座右の索引を取て引き試むれば之に關する記載は何々の雜誌の何々の號に在ると一目の下に瞭然たるべし苟も學者たる者は必ず一本を備へざるべからず

●發賣所　東京市本郷區龍岡町卅四番地（電話下谷一六七二番）　吐鳳堂書店

肺結核ト肋膜炎

全壹册　正價金七拾五錢
郵稅金四錢

本書ハ醫事新聞新規讀者諸彥ノ渴望ニ應シ嘗テ附錄トシテ發行シタル獨逸大家最近學說集其五（隔離病室ニ於ケル結核ノ療法＝プロフェッソルア、メーレル述）及其六（肋膜炎＝プロフェッソルエル、スチンチング述）ヲ再版シ且最近二年間肺結核及肋膜炎ニ關シテ醫事新聞ニ抄載セシモノヲ蒐輯シ聊カ順序ヲ追フテ之ガ區別ヲ立テ以テ繙閱ノ便ヲ計リタルモノ也、敢テ久シク貴需ニ背クノ罪ヲ謝ス

目次

肺結核＝結核ノ歷史。肺治療院ノ位置。患者ノ選擇。病歷表及其記入ノ注意。咯痰及其除去法。結核菌染色法。院內規則。患者ニ對スル注意。榮養及食餌。大氣療法。水治療法。喉頭療法。隔離室療法ノ効果。特種療法（以上八十七頁餘）
肋膜炎＝汎論。原因及分類法。臨牀的症狀。診斷。豫後。療法。後療法（以上三十六頁）
附錄＝數件（約二十頁）

發行所　醫事新聞社　發賣所　吐鳳堂書店

金澤醫學專門學校 十全會會則摘要

（明治三十八年五月改正ス）

一本會ハ本校職員、卒業生、學生及本校ニ緣故アル者ヨリ成リ職員及卒業生ヲ特別會員トシ學生ヲ通常會員トシ本校ニ緣故アル者ヲ贊助會員トス

本校職員卒業生及學生ハ總テ本會會員タルノ義務アルモノトス

一本會ニ講話部、雜誌部、學術實習部、遊技部、劍道部、柔道部及弓術部ノ七部ヲ置ク

一本會一切ノ經費ハ特別會員及通常會員ノ負擔トス

本校職員タル特別會員（校內特別會員）ハ會費トシテ相當ノ金額ヲ寄附スベキモノトス

本校卒業生タル特別會員（校外特別會員）ハ會費トシテ一ケ年金壹圓ヲ納ムベシ但シ一時ニ金參圓ヲ納ムル者ハ五ケ年ヲ一期トシ該期間本會發行ノ雜誌ヲ配布ス

將來卒業ノ特別會員ハ最終授業料納付ノ節必ス一時ニ三ケ年間ノ會費金參圓ヲ納ムベシ

通常會員ハ會費トシテ一ケ年金壹圓五拾錢ヲ納ムベシ

特別會員ニシテ引續キ三ケ年間會費未納者ハ除名ノ上一般會員ニ通告ス

一本會ノ會計年度ハ毎年九月ニ始リ翌年八月ニ終ル

一講話部ニ於テハ毎年一回以上講師ヲ聘シテ道義上ノ講話ヲ聽聞シ又隔月一回醫學及藥學ニ關スル講談會ヲ開ク

講話部ニ於テハ特ニ語學會ヲ開クコトアリ

一雜誌部ニ於テハ毎年五回醫學及藥學ニ關スル會員ノ演說談話並ニ本校ノ現況、會員ノ動靜等ヲ記載シタル雜誌ヲ發行シテ會員ニ頒ツ

雜誌部ニ於テハ本會所屬ノ圖書ヲ管理ス

一學術實習部ニ於テハ專ラ小野慈善院ノ患者ニ就キ診察治療ヲナシ學生ヲシテ臨床實習及調劑實習ヲナサシム

（運動部規定ニ關スル規定摘要ハ畧ス）

▲投稿心得七則▼

一投稿用紙は中折紙を用ゐ必ず楷書たるべし殊に洋字は字體を明かに記入せらるべし

一端書洋紙等に認めたるもの又は字體亂雜なるものは總て没書とす

一誌上匿名を望まるゝも原稿には必ず住所姓名を記入せらるべし

一言の政治に渉り或は德義に背くものは一切登載せず

一未完の原稿は採錄せず

一原稿採否の權は編輯長にあり

一一旦寄送せられたる原稿は返戻の需めあるも之に應せず

十全會雜誌部

明治三十八年十二月五日印刷
明治三十八年十二月八日發行

編輯兼發行者　石川縣金澤市廣坂通新道二十六番地　森島彥夫

印刷者　石川縣金澤市尾張町八十二番地　宇野孝太郎

印刷所　同所　活文堂　電話【六十五番】

發行所　金澤醫學專門學校十全會